丹後地区広域市町村圏事務組合2市2町政策連携会議調査報告書

近世・近代における 郷土の先覚者

2 0 1 1 . 3

丹後地区広域市町村圏事務組合

丹後地区は、日本海を通して中国大陸や朝鮮半島の先進技術や物資がもたらされ、古く弥生時代、古墳時代から『丹後王国』とも称されるような進んだ技術や文化が花開いた地域です。

弥生時代中期には鉄製工具を使った水晶を原料とする玉作りが行われ、古墳 時代前期末から中期初頭にかけては蛭子山古墳、網野銚子山古墳、神明山古墳 などの巨大な前方後円墳が築かれました。また、遠處遺跡の発見により、製鉄 も早くから行われていたことも明らかになっており、極めて進んだ技術を持っ た輝かしい地域だったことがわかってきました。

これらの古代丹後の隆盛は私たちの誇りとするところですが、同時に丹後人の先取・勤勉・実直といった気質は連綿と受け継がれ、丹後の歴史と風土を背景に、輝かしい功績を残した偉人たちを数多く輩出しています。これら郷土が生んだ先覚者の活躍も、私たちが大きな誇りとするものです。

この冊子では、丹後地区の出身者や縁のある人で、地域や産業の振興に尽力 した人、学問や芸術の分野で活躍し多くの優れた作品を残した人、社会福祉や 教育において功績を刻んだ人、歴史的な出来事に中心的な役割を果たした人な どを取り上げ、その業績の一部を紹介しています。

それぞれの生きた時代、活躍した分野もさまざまですが、どの人も多くの困難に立ち向かいながら、ねばり強く解決の糸口を見つけ、新しい時代への扉を切り開いていった偉大な先人たちです。

この冊子に出会った方が、これらの丹後地区の先人たちの歩みを振り返り、 丹後に対する理解と郷土への思いを深めていただき、また将来を担う地域の子 どもたちに、これらの先人達の足跡を語りついでいく一助になれば幸いです。

平成23年3月

丹後地区広域市町村圏事務組合 理事長 中 山 泰

目 次

1	はじめに	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • •	•••••	• • • • • •	•••••	1	
2	調査事業の経過	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	• • • • • •	•••••	2	
	取り組みから検討委員会の設置							
3	近世近代における郷土の先覚者	•••••	• • • • • • • •	•••••	• • • • • • •	•••••	4~52	2
	宮津市							
	① 笠井 浅七	· 5	(10)	谷	源蔵		29	
	② 新宮 凉庭	. 6	_		伊助		30	
	③ 和田 屏山	. 7	_		字平		31	
	④ 本庄 宗秀	. 8	_	羽田	亨		32	
	⑤ 依田 伴蔵	. 9	14	小谷	勝重		33	
	⑥ 西村 奇石	10	15	平林初	之輔		34	
	⑦ 売間九兵衛	11	16	藤原	勘治		35	
	⑧ 黒田宇兵衛	12	17	中村	遥		36	
	⑨ 沢辺 正修	13	18	小牧源	太郎	•••••	37	
	⑩ ルイ・ルラーブ	14	19	田村	茂	•••••	38	
	① 津原 武	15	与謝野	野町				
	⑫ 塩田 広重	16	1	与謝	蕪村	•••••	39	
	① 小室 万吉	17	2	吉田新	兵衛	•••••	40	
	⑭ 岩崎 英精	18		吉田為	次郎			
	⑤ 前尾繁三郎	19	3	与謝野	禮嚴		41	
	京丹後市		4	真名井	純一		42	
	① 足立久兵衛	20	(5)	小室	信夫		43	
	湖口小左衛門		6	神鞭	知常	•••••	44	
	② 絹屋佐平治	21	7	小室	信介	•••••	45	
	③ 一木禅師	22	8	西原猪	太郎	•••••	46	
	④ 初代松助	23	9	鳥居篤	治郎	•••••	47	
	二代長谷川松助		10	細井和	喜蔵	••••	48	
	⑤ 蒲田善兵衛	24	11)	太田	典禮	•••••	49	
	⑥ 松本重太郎	25	12	石川	晴彦	•••••	50	
	⑦ 稲葉市郎右衛門英裕	26	伊根明					
	稲葉市郎右衛門景介		1	品川萬	右衛門	児	51	
	⑧ 松田 道	27	2	三嶋	一聲	••••	52	
	⑨ 飯室 岸蔵	28						
,						-	. 2 - 2	•
4	丹後地区の先覚者一覧表)
5	引用・参考文献一覧	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • •	•••••	• • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	57	7

1

はじめに

丹後には、歴史の中で大きな役割を果たした人、事業で大きな功績を挙げた人、地域 貢献に力を尽くした人など多くの人が活躍してきました。これまで、郷土史の中で紹介 されたり、郷土の人物誌として取り上げた刊行物もいくらかあります。

この本で紹介するのは、2市2町(宮津市、京丹後市、与謝野町、伊根町)の丹後地区の出身者やこの丹後に縁のある人で功績を残した人、丹後で活躍した人たちです。

伝説上の人物、伝承の中で伝えられている人で、存在したことが疑問視される人、時代が古くその人の足跡をたどることが難しい人については除く必要があると考えました。このことから時代としては近世から近代の中で足跡の確かな人物について考えることとしました。また、現在さまざまな分野で功績を挙げ、活躍している多くの人がいますが、その人の評価が定まっていない点を考慮して、現在活躍している方は除いて考えることとしました。

この調査事業は、十分な資料がなく検証が不十分なものも多く、取り上げた人物についてもほんの一部です。この他にも多くの業績を刻んだ人、大きな事業をなしとげた人も数多く存在しています。今後さらに検討する必要があると考えており、その途中の段階での検討資料の報告です。また、選定の基準も必ずしも統一的なものではありません。丹後の歴史の中で、ほんの一瞬の出来ごとであるけれども、心に残るような出来事に関わった人物も紹介しています。また、紙面の関係でその人の足跡を1ページに要約しており、その人のほんの業績の一部のみの紹介です。

丹後に生まれ、輝かしい業績をあげて郷土の誇りとなる人、その生き方において印象深い人、丹後の歴史の1ページにおいて語り継いでいきたい人、そういった視点を入れています。将来を担う子供達にこういう人が丹後に生きていたということを語りついでいきたいと願うものです。

この冊子が、今後のさらなる人物の業績や調査へとつながり、検討していく資料となることを期待するものです。さらには子供達への郷土の学習や地域おこしなどの一助になれば幸いです。

2

調査事業の経過

取り組みから検討委員会の設置

2市2町(宮津市、京丹後市、与謝野町、伊根町)の丹後地区では、歴史の中で大きな功績を挙げた人、政治、経済、文化、芸術の分野で業績を残した人、地域振興において力をつくした人など数多くの人が活躍してきました。

これらの人物に関する功績などについては、市町村史や郷土史の編さん事業、それぞれの産業や各種団体の刊行物において調査されたり、記述されてきました。功績を挙げた著名な人について、各種団体や地区の中で、その人の業績などを顕彰するような取組が行われたことはありますが、全体的に見ると、案外それらの資料が少ないのも事実です。

とりわけ、小学生、中学生など児童生徒を対象にした郷土の人物を扱った資料などは特に少なく、従って自分達の生まれた郷土の人たちであるにも関わらず、これら各分野で活躍した人たちのことを知らない子供達が多いのが現状です。

これらの現状を踏まえて自分の市町村だけでなく、少し範囲を広げて同じ丹後地区の中で活躍した先人達の軌跡をまとめ、この丹後人の先輩、先覚者たちをまとめてみようということで出発しました。丹後地区の領域の人物に関するものであるので、丹後地区広域市町村圏事務組合において政策連携会議を設置して、丹後で活躍した先覚者、人物についての調査をして、子供達の教育や地域づくりに活かしていこうということで取り組むことになりました。

平成20年度より2市2町の行政担当者において検討することとなり、各市町から1名ないし2名の担当者を選出してスタートしました。その後、各市町から学識経験者にも加わっていただき検討会議を組織して検討しました。しかしながら、それらの検討、調査内容も十分ではなく、まだ途中経過のような段階にすぎませんが、今後の検討する資料として、簡単な小冊子を刊行することとしました。

最も難しいことは功績のある人を選びだす作業です。その際の選定の基準をどうするか、どういう基準で選ぶのか、地域貢献をどう評価すべきか、また功績だけでなく歴史の中での1ページとなるような出来事に関わった人、中心的な役割を果たした人なども選定の際に考慮いたしました。さらには、その人の生き様や生き方などについて、心に残る人も多く存在しています。これらの選定基準について統一的なものを定めるにはいたっていません。従って、今回紹介したひと以外にも功績を挙げた人、活躍した人、著名な人、地域貢献をした人は数多く存在しています。

また、紹介している人物についても、その人の業績のほんの一部の内容となっています。その人のいろいろなエピソードや人柄などには十分記述できていません。限られた時間の中での編集作業でしたので、人物についての調査も十分でなく、いわば検討する途中の内容で極めて不十分なものです。

今後、さらに詳しいこれらの人に関する調査が行われて、子供達への教育に活かされ、 丹後への理解と郷土愛の育成につながることを期待するものです。この小冊子が近世、 近代において丹後に生きた先覚者、先人たちへの関心と理解、ひいては丹後の歴史、ま た地域づくりの一助になれば幸いです。この事業について取り組んだ組織等について、 以下紹介しておきます。

2市2町政策連携会議

郷土の著名人の調査検討準備会

宮津市 河嶋 学

宮津市 中嶌 陽太郎

京丹後市 吉田 誠

与謝野町 佐藤 晃一 (平成20年度)

与謝野町 下川 賢司 (平成21・22年度)

伊根町 大西 喜久雄

丹後広域市町村圏事務組合 河嶋 守男 (平成20·21年度)

2市2町政策連携会議

功績のある郷土の著名人調査検討会議

委員	員 長	糸井	昭	京丹後市
副委	員長	小野	泰昭	与謝野町
委	員	尾関	義昭	宮津 市
委	員	奥野	繁雄	伊根町
委	員	中嶌	陽太郎	宮津市
委	員	吉田	誠	京丹後市
委	員	下川	賢司	与謝野町
委	員	大西	喜久雄	伊根町
事》	务 局	竹内	昌明	丹後広域市町村圏事務組を

3

近世・近代における 郷土の先覚者

2市2町にゆかりのある、近世から近代にかけて活躍し、 功績を残した郷土の先覚者を紹介します。人物の紹介順序は 宮津市、京丹後市、与謝野町、伊根町順とし、基本的に生年 月日順に紹介しています。尚、巻末に紹介者の一覧表を添付 しています。

签井 浅七 カカカ あきしち



笠井浅七頌功碑

笠井浅七氏は、江戸時代に野田川から須津の水路を掘削し、新田の開拓や宮津の新町の埋め立てを行うなど土木工事を実施し地域振興に力を尽くしました。

氏は、寛保3年(1743年)、才三郎の次男 として与謝郡須津村に生まれました。

野田川より須津の浜にいたる水路を掘削し、土砂を運んで海岸を埋め立て、新田二町歩余を開いくなど地域貢献をしました。これは丘陵にトンネルを掘削する大規模な工事で、私財を投じたと伝えられています。この時に造られた水路は「浅七水」と呼ばれ、今でも一部で痕跡が残っています。

また、須津・普甲・栗田の峠道や上宮津畷 の修理など宮津藩の土木事業に関わってお

り、特に、文化14年(1817年)からは、頭取として宮津新浜の埋め立てに従事しました。この工事は、町中の男子全員の出役(労働力徴発)による当時としては大規模なものであり、大手川河口の砂を利用して魚屋町・河原町の裏手が埋め立てられました。埋立地は魚屋町新道・西新道と呼ばれ、このうち魚屋町新道では、中町の東側に弘化4年(1947年)頃から家が建ち始めました(新地一番地)。この周辺は、後に「東新浜」と呼ばれ、文化8年(1811年)頃から幕末まで料理屋・置屋が軒を連ねるなど賑わいをみせる地域となりました。明治時代以降には旅館が建ち並び、現在も宮津市街地の中でも賑やかな街並みとなっています。

天保2年(1831年)、笠井氏はその生涯を閉じました。享年88歳のことです。明治43年(1919年)には、与謝郡長の田邊信成により、「浅七水」の水路の傍らに、笠井浅七氏の功績を顕彰する高さ180cmの頌功碑が建てられました。

新宮 凉庭 _しんぐう りょうてい __



新宮凉庭『新宮凉庭と丹後の医の流れ』 (丹後郷土資料館)より転載

新宮凉庭氏は、江戸時代後期の蘭方医で、 西洋の医学書の翻訳を行い、「順正書院」を 通して医学教育を行うなど江戸時代の医学の 推進に大きく寄与しました。

氏は天明7年(1789年)丹後国由良村(宮津市)の医師新宮道庵の子として生まれました。幼くして福知山藩医であった伯父の有馬凉筑のもとに寄宿して医事や経書を学んでいます。

18歳で帰郷して開業しましたが、西洋医学の書に接し、文化7年(1810年)、24歳のとき田辺藩の援助を得て、長崎へ医術修業に出発しています。

文化10年(1813年)長崎到着後、出島出 入医師の資格を得てからは、多数の医学書の

翻訳を行っています。

文政元年(1818年)に帰郷し、翌年京都に出て開業し、しだいに名声があがっていきます。天保10年(1839年)、53歳のとき凉庭は南禅寺門前に学問所を建設しており、京都所司代間部詮勝によって順正書院と命名されました。この書院は、8学科を設け、凉庭みずから翻訳書を講じる京都初の蘭医学校であり、文化サロンとしての性格も有するものであり医学教育に大きな役割を果たしています。

弘化2年(1845年)頃、由良に帰郷しており、安政元年(1854年)、京都にて病気のためにその生涯を閉じました。享年68歳のことです。

和田 屏山 わだ へいざん



紫竜昇天図(実相寺蔵)『郷土と美術』より転載

和田屏山氏は、幕末丹後を代表する画家で、 特に竜虎図を得意として多くの作品を残しま した。

氏は文化3年(1806年)7月、宮津魚屋西堀川塩屋太兵衛(縮緬問屋)の二男として生まれました。通称吉之助または義平治といい、本名は堅寧、号は義乗、恭通、仲穀で和田恭通を約して田恭とも称しています。

はじめ宮津藩士 菅沼周鳳(谷文晁門)に 学び、のちに京都へ出て岸駒の門に入りました。修業を終えてのち宮津に帰り、土地の人々 の要望にこたえて多くの作品を遺しました。

画材は広く山水花鳥にわたっていますが、 特に蓬萊竜虎を得意とした画家です。

宮津に残る最大の遺作は、宮津金屋谷経王 寺の本堂天井いっぱいに描かれた竜図が有名 です。その落款に用いた印章は、和田家菩提 寺真照寺の親の墓石の裏に彫った「屏山」の 印と同じものです。

明治初年ころ大阪に出て、明治6年(1873

年)、大阪高津の地で生涯を閉じました。享年68歳のことです。

菩提寺の真照寺は真宗でしたが、屏山は日蓮宗を信仰し、大阪天王寺区の日蓮宗円 妙寺に葬られています。

本庄 宗秀 ほんじょう むねひで



本庄宗秀氏は、幕末期の宮津藩主です。 宗秀氏は海岸警備に当たり各地に台場を築 き、また藩政改革につとめ国産振興を進めま した。また幕府では老中の職にあり第2次長 州戦争では副総督として出陣するなど要職を 務めました。

氏は、本庄宗允の次男で、文化11年(1814年)6月、本庄宗発の養子となり、文政7年(1824年)、従五位図書頭に叙爵。天保11年(1840年)、9月18日、本庄宗発の死去により11月14日に家督を相続します。翌日伯耆

守に改めました。数え30歳の時です。

翌年12月、奏者番に任命されますが、天保14年(1843年)、病気を理由に辞職しま した。

弘化3年(1846年)、奏者番に再任され、安政5年(1858年)10月、寺社奉行を 兼務することとなりました。「安政の大獄」で五手組に任じられており、万延元年(1860年)には、大坂城代に任命されています。

文久2年(1862年)、京都所司代に任命されますが、朝廷の反対で赴任できず辞任 しています。

元治元年(1864年)8月5日、宗秀は老中に任命され、8月18日に就任しています。 慶応2年(1866年)、第2次長州戦争に先鋒副総督として出陣して、捕虜とした長州 藩士を独断で解放し、停戦工作を行ったため、老中を罷免され、同年10月家督を宗武 に譲り蟄居することとなりました。また、書家としても知られており多くの作品を残 しています。

維新後は神官となり、明治6年(1873年)11月20日、その生涯を閉じました。享 年65歳のことです。

ペリー来航等に当り海岸警備のため宮津湾各地に台場を築造、安政3年(1856年)には城下島崎に台場を築造(安政4年完成)しています。また「産物改法」等を打ち出して、藩政改革や国産品の奨励など産業振興に尽力しました。

依田 伴蔵 」よだ ばんぞう



依田伴像をまつる「残念社」(広島県廿日市市大野町)

依田伴蔵氏は宮津藩士であり、長州戦争において戦死しますがその時の功績が伝えられています。

氏は、文政6年(1823年) 3月23日生まれで、通称伴 蔵と称し、宮津藩の軍務一 切を管掌し、藩主もその教 えを受けたといいます。

慶応2年(1866年)の 第二次征長戦争に藩主本庄 宗秀が先鋒副総督として出

兵した際には日夜、軍事に参与として関わっていました。

同7月、宗秀が拘禁した長州藩の家老を放還し、伴蔵氏に密旨を持たせて長門へ派遣しましたが、長州軍は伴蔵氏の来るのを察知しており、待ち構えて一斉射撃を行いました。伴蔵氏は一声「残念」と大声を出し、志むなしく44歳で倒れ亡くなりました。

その後、伴蔵氏の使命が長州人を説いて戦を収めることにあったことから、長州では氏の遺体を納めて手厚く葬り冥福を祈ったとされます。現在、広島県大野町には依田伴蔵氏をまつった「残念社」が残されています。

なお明治維新の際、宮津藩が取り潰しを免れたのは、老中であった本庄宗秀が、長 州藩の家老を釈放したことが評価されたことによると考えられています。

西村 奇石 にしむら きせき



岩上に孔雀図(『郷土と美術』より転載)

西村奇石氏は、幕末明治の丹後を代表する 画家です。

氏は文政9年(1826年)2月、宮津京街 道宮津藩士 内藤郡八の二男として生まれま した。初名は慎太郎と称しています。天保3 年(1832年)、7歳の時、西村芳郎(吉郎) の養子となり西村姓を名乗りました。

和田屏山と同じく、谷文晁門下の菅沼周鳳 について学び、鳳巣と号しました。その後、 和田屏山につきますが、藩主本庄宗秀から京 都岸連山に委託されて上京し、その時に号を 奇石と改めました。嘉永5年(1852年)、28 歳で宮津に帰り、創作活動に励み多くの作品 を創作しています。

花鳥を題材とした画風を得意としますが、 画材は幅ひろく多くのものを描いており、郷 土の人々に広く親しまれています。弟子とし て羽賀鳳声、舞鶴の福田薫山、福知山の塩見 杏山、出石の柴山次山らが知られています。

明治44年(1911年)12月、86歳でその生 涯を閉じました。菩提寺は金屋谷国清寺と なっています。

売間 九兵衛 『うるま くへい



撥雲洞トンネル

売間九兵衛氏は、明治19年 (1886年)に完成した栗田峠撥雲 洞トンネルの開鑿を推進するなど 地域振興に力を尽くしました。

氏は弘化2年(1845年)に宮 津波路に生まれています。

明治12年(1879年)頃、売間 九兵衛氏の栗田峠開鑿計画の申出 を上司町が衆議のうえ採用しまし

た。開鑿の方法は水力によって峠を切り下げる計画であり、明治12年6月から売間氏により峠の頂上まで水路を開く工事が開始され、同12月に完成しています。さらに上司町から資金が渡され、売間氏は引き続き継続工事のため上司町に寄留しました。

しかし、資金集めは困難を極め、明治13年(1880年)4月には、売間氏、波路村、獅子崎村、上司町の4名により京都府へ願書を提出し、費用負担を請願しました。また「趣意書」を作成して、有志による資金募集も行っています。売間氏らの請願は許可されませんでしたが、翌14年4月、京都府会は京都から宮津に達する車道開鑿の議案を府会に出すよう建議し、6月に初年度分の経費が議決されるに至りました。

その後、栗田峠の開鑿は京都府による工事として行われることになり、工事の方法は切り下げから隧道工事に変更になりました。その結果ようやく工事は明治17年(1884年)から開始され、明治19年(1886年)夏に完成し、8月4日開通式が行われました。この間、売間氏は、栗田峠の開鑿を呼びかけ、住民の協力を得て峠の切り下げによる工事に取組み、京都府による隧道工事の実施に際しては、明治19年の完成まで工事に関わっています。

売間氏はこの工事負担のため莫大な負債をかかえ、所有の財産をほとんど失ったといわれており、地元の人々も工事完成にむけて、多額の費用と労力を負担しました。 開鑿工事費用をめぐり、売間氏は家財を売却し、以後の残金返済を行うこととなりました。

その後、氏は波路村を離れて舞鶴へ移りましたが、約20年後の明治42年(1909年)、 トンネルの波路側に「隧道開鑿主唱者売間九兵衛翁之碑」の石碑が運送業者有志により建立されています。

そして大正元年(1912年)にその生涯を閉じました。享年67歳のことです。

黒田 宇兵衛 ■⟨ろだ うへい



黒田宇兵衛氏は、明治時代の地方財界、金融界で活躍し、また宮津市長や府会議員なども歴任し政治家としても活躍しました。

氏は安政2年(1855年)6月生まれで、 翌年に、先代黒田宇兵衛の養子となりました。

黒田家は「綿宇」の屋号を持ち、もとは綿布問屋でありましたが、天保2年(1831年)に酒造業を創業した旧家で、代々町の組頭等もつとめていました。

宇兵衛氏は明治3年(1870年)、16歳で宮 津町蛭子組頭となり、明治5年には私学寮取 締を命じられています。

明治7年(1874年)に白柏町触頭、明治

9年に副戸長を務め、明治10年(1877年)には白柏ほか3か町戸長を務めました。明治13年(1880年)、府会議員補欠選挙に当選し、明治24年(1891年)には、第2代宮津町長に就任しました。

明治25年(1892年)8月、宮津特別輸出商港期成同盟を組織して幹事長となり、翌年には特別輸出港の指定を受けるなど宮津港の振興に力を注いでいます。また明治27年(1894年)、有志と宮津鉄道期成同盟会を組織し、委員として宮津鉄道の敷設にも尽力するなど、特に地域経済にとっての動脈である交通網の整備の重要性を説き、整備に向けて活躍しました。

一方、明治27年には株式会社宮津銀行の相談役となり、大正5年には頭取に推されました。さらに丹後鉄道・宮津電灯の株式会社設立にも関与するなど、地方財界、金融界でも重きをなす存在でした。

大正15年(1926年)6月、その生涯を閉じました。享年72歳のことです。墓所は 金屋谷妙照寺墓地となっています。

沢辺 正修 *** せいしゅう ***



沢辺正修像 (同志社大学小室・沢辺記念文庫)

沢辺正修氏は、明治前期の天橋義塾の指導者であり、自由民権運動に指導的役割を果たしました。

氏は安政3年(1856年)1月、沢辺淡蔵の長男として宮津柳縄手に生まれました。

祖父の北溟は宮津藩の儒臣として、文政元年、藩学礼譲館の開校に尽力し、山陰の宿儒といわれた人物です。父の淡蔵も礼譲館の学頭となるなどの教育者として活躍しました。

正修氏は8歳で礼譲館に入り、幼い頃より 学問において頭角を顕し、明治元年2月には、 わずか13歳で礼譲館の句読講師となり、藩の 人々でその才学に驚かぬ者はなかったという

風に伝えられています。

明治8年、宮津の小笠原長孝らと天橋義塾設立に尽力し、明治11年に帰郷して同塾の幹事となり、12年には社長に就任しました。また国会開設運動に指導的役割を果たし、明治14年、大阪に立憲政党を創立して中心的役割を果たしています。

明治18年に肺病が悪化し療養につとめましたが、明治19年(1886年)6月19日、ついに帰らぬ人となりました。享年31歳の若さでした。

ルイ・ルラーブ



ルイ・ルラーブ氏は明治時代に丹後にキリスト教を布教し、宮津に天主堂を建設したほか、裁縫伝習所を開設し女子教育につとめました。

氏は、1857年12月15日にフランスのリヨン府マルセノ、サンテアンに生まれました。

1885年9月、パリ外国宣教会大神学校神 学哲学科卒業。27日司祭となり初ミサ奉献、 その日、日本への布教を命じられています。

その結果、明治18年(1885年)12月21日

来日し、大阪京都教会を経て、明治21年(1888年)12月、布教のため宮津に来ました。 当初は借家を用いていましたが、明治28年(1895年)家主の田井五郎右衛門が受 洗し、敷地ともども教会に寄付したということです。これにより教会堂が建立された のが、現在の天主堂となっています。明治29年(1896年)5月6日に落成し、献堂 式が行われています。

ルラーブ氏は、明治40年(1907年)4月、地方女子教育のため宮津裁縫伝習所を創設、子女に家事裁縫技芸の伝習を始めるなどの活動も行っており、明治43年(1910年)、神父来朝25周年、司教叙品銀祝記念として伝習所、司祭館を建設しました。これらの地域への女子教育が認められ、大正6年(1917年)5月、宮津町から町功労者として表彰されています。

大正15年(1926年)には宮津裁縫伝習所創立20周年記念として校舎の増築を行い、 名称も宮津暁星裁縫女学院と改称しました。以後も、学制の改革、校舎の新築等に尽 くしています。

また、昭和2年(1927年)3月、丹後大震災に救護班を組織して、いち早く罹災者救護に活躍するなど災害の救援活動にも大きく貢献しています。同年には震災復興として、破壊された天主堂の改築、拡張も行いました。

昭和16年(1940年)大阪へ移り、翌年(1941年)2月1日、その生涯を閉じました。 享年84歳のことです。

津原 武 つはら たけし



津原武氏は、大正から昭和にかけての政治家であり、丹後縮緬の振興、発展にも大きく貢献しました。

氏は明治元年(1868年)、鳥取藩士小林繁の三男として鳥取市行徳に生まれました。

明治12年(1879年)に津原言行の養子となり、 16年(1886年)に家督を相続、大坂関西法律学校、 東京の明治法律学校で法律を学び、明治24年には 代言人試験に合格し、代言人免許を得ています。

明治25年に宮津町に住居を定め、同所に弁護 士事務所を開いており、以後昭和12年まで弁護 士の業務に従事しています。

明治31年(1898年)に宮津町会議員、明治32年与謝郡会の議員に推され、明治44年退任まで3期にわたって議員を勤めました。明治44年立憲政友会の候補として府会議員に当選しました。そして、大正4年(1915年)に神鞭知常の後継者として推され、第12回総選挙に立候補して当選し国会議員となりました。

一方、特に丹後機業の育成発展に力を注いでおり、大正6年(1917年)、丹後織物 与謝郡同業組合長に就任し、次いで大正10年丹後縮緬同業組合を結成して初代組合長 に推され、昭和8年3月まで在任しています。その間、懸案であった国練検査制実施のた め尽力し、昭和4年6月、ついに同制度を確立し、丹後機業発展の礎石を築きました。

また丹後大震災後の機業復旧復興に奔走しており、丹後縮緬宣伝会(通称「丹宣」)を全国各府県の主要都市で盛大に開催し、全国津々浦々にまで丹後縮緬の声価をひろめました。

昭和7年(1932年)3月、丹後縮緬工業組合設立にあたり初代理事長を務め、同13年6月まで重任。その後は同組合理事兼顧問となり、また昭和7年7月より工業組合中央会理事を兼ねました。昭和10年10月、縮緬工業組合連合会を結成し、初代組合長に推され、晩年には丹後縮緬工業組合の後身である丹後織物工業協同組合の顧問として、死去にいたるまでその指導にあたっています。

昭和28年(1953年)5月20日、生涯を閉じました。享年84歳のことです。菩提寺は宮津小川真照寺です。なお、遺志によって津原家を絶家とし、旧宅をはじめ遺産は宮津町に寄贈されました。

塩田 広重 しおた ひろしげ



塩田広重 (癌研有明病院提供)

塩田広重氏は大正から昭和にかけての外科 医の権威者であり、成人病の研究の提唱者と しても知られ、老人医療の発展に貢献しまし た。

氏は明治6年(1873年)、京都府宮津市に 生まれ、明治32年(1899年)、東京帝国大学 医学部を卒業しました。1年間、病理解剖学 の研修を受けたのち、外科学教室に入り当時 の外科医の権威であった近藤次繁やスクリバ の指導を受けています。その後、オーストリ ア、ドイツに留学し、帰国後の大正12年(1923 年)より東京帝国大学教授に就任しました。 済生会の運営にも携わり、昭和3年(1928年)

より日本医科大学の学長を兼務するなど医学の推進に力を尽くしました。

このように塩田氏は大正末から第二次世界大戦直後まで、指導的な地位にあった外科医であり、胃腸手術の権威として知られた存在でした。特に、昭和5年(1930年)に浜口雄幸首相が東京駅で狙撃され重傷を負った際には、当時は一般的ではなかった輸血を行い手術を成功させたことは有名な話しで、よく知られています。

また、第一次大戦では日赤救護班長としてフランスで医療救護に当ったほか、第二次大戦直後には、厚生省医療局長として軍病院の転用に関わるなど医療の充実にも力を尽くしています。

成人病研究の提唱者としても知られ、老人学の草分けとして寿命学研究会を創設するなど老人医療の発展にも貢献しました。

これらの功績が認められ、昭和29年(1954年)に文化功労者、昭和39年(1964年) には勲一等瑞宝章を受章しています。

そして昭和40年(1965年)にその生涯を閉じました。享年91歳のことです。著作に『メスと鋏』などが知られています。

小室 万吉 (洗心) ■こむろまんきち (せんしん) ■



小室万吉氏は、郷土史家、俳人として『天 橋立集』など多くの作品・著作を残し、天橋 立の観光開発にも尽力しました。

氏は明治10年(1877年)、父小室利助、母せいの長男として岩滝町字岩滝村に生まれ、父は農業に従事し、母は質屋を営む家庭に育ちました。

氏は幼少より健康に優れなかったことから、文学に親しみ十五六歳より俳道を志したと伝えられています。俳匠蒲田千楽、小田切獅子の教えを受けた「ホトトギス」系の俳人として知られ、多くの俳句を残し、洗心を俳号としました。また、鳥取藩の儒学者・清水松城の高弟であった有田太魯から漢詩を、京都大家・山田古香から書道を学び文人として

の素養を高めていきます。

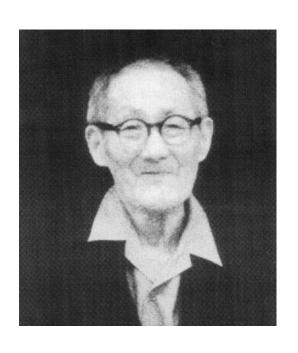
丹後時代の蕪村の研究者として知られており、見性寺の蕪村句碑、大内峠の碧梧桐の句碑など26か所におよぶ句碑の建立に力を注ぎました。同時に、天橋立や大内峠の観光開発に尽力し、与謝野鉄幹・晶子をはじめ多くの文人墨客を丹後に招いたことでもよく知られています。

さらに郷土史の研究も行い、郷土史家として永浜宇平・橋本信治郎と『丹後史料叢書』の出版に携わっており、そのほか紀行文80編・漢詩約600編・和歌約1000首・俳句約2300句を集成した『天橋立集』は、天橋立研究のバイブルとなっています。

こうした文人としての活動のほか、岩滝町会議員・岩滝区長・岩滝信用購買利用組合理事長・岩滝町選挙管理委員長などの公職を歴任するなど行政の推進、地域の振興にも力を尽くしました。自治功労者として、昭和41年(1966年)に勲六等瑞宝章を叙勲しています。

そして、昭和45年(1970年)、その生涯を閉じました。生前の昭和36年に、「五車の書を師とし友とし冬篭」という氏の名作を刻んだ句碑が建立されています。

(注) 小室万吉氏は、現在の与謝野町岩滝の出身ですが『天橋立集』など天橋立との関わりから宮津市で紹介しています。



岩崎英精氏は、郷土史の研究において多くの著書を残し、天橋立を守る活動や観光普及などにおいても力を尽くし功績を残しました。

氏は、明治30年(1897年)に父岩崎嘉助、母いわの次男として福知山市字石原に生まれ、誠一と命名されました。明治45年(1912年)に与謝郡加悦尋常小学校を卒業し、姉の嫁ぎ先である加悦町実相寺の貫名日英師のもとで修業することとなり、英精と名乗りました。高等小学校卒業後、勉学のため上京し、弁護士であった従兄弟のもとで学んでいます。そ

の後大正3年頃、中国大陸に渡り見聞を広げ、孫文や蒋介石らと知り合うこととなります。 しかし幹性肋膜にかかり大正9年頃、母の居住地である舞鶴町に帰ることとなりました。

大正10年(1921年)より宮津町において、地方新聞『三丹日々新聞』の発行に携わり、昭和5年(1930年)の『三丹新日報』創刊に当たっては主筆を務めていました。また、 丹後縮緬工業組合・水産庁資料整備委員会・京都府漁業協同組合連合会の嘱託として 丹後縮緬機業史や京都府沿岸漁村歴史資料調査整備に関わるなど、のちの郷土史の研究につながる活動をしています。

その後、昭和25年(1950年)以降には、丹後地方史友の会・丹後民謡保存会・天橋立を守る会の結成、宮津市文化財保護委員会の創設に携わり会長などの要職を歴任するなど文化財の保護と普及啓発に力を尽くしました。郷土史の研究や文化財保護を積極的に推進するかたわら、天橋立観光協会参与として、観光資源の教育にも携わって活動しました。

こうした功績が認められ、昭和33年(1958年)には京都府知事から環境衛生功労者、昭和38年(1963年)には京都府教育委員会より京都府教育功労者、昭和41年(1966年)には北近畿観光連盟会長より北近畿観光事業功労者として表彰され、昭和43年(1968年)には宮津市の文化功労者として「宮津文化賞」を受賞しています。

平成元年(1989年)、太田病院(宮津市)にて永眠しました。享年92歳のことです。『丹後機業の歴史』・『京都府漁業の歴史』・『丹後伊根浦漁業史』・『京都府漁港の歴史』・『丹後の宮津』・『丹後の民謡』・『上宮津村史』など多くの著作を残しており郷土史の研究に大きな功績を残しました。



前尾繁三郎氏は、戦後の政治家であり昭和 48年(1973年)からは衆議院議長をつとめ るなど政治の中枢で活躍しました。

氏は明治38年(1905年)、陶器問屋(屋号: 道具屋)を営む父前尾勘七、母とみの三男と して、宮津町字住吉に生まれました。宮津男 子尋常高等小学校、宮津中学校(現・宮津高 校)、第一高等学校文科乙類を経て、昭和4 年(1929年)に東京帝国大学法学部を卒業 しました。在学中に、高等試験行政科ならび に司法科に合格しています。

同年、大蔵省に入省し、名古屋・大阪・東 京税務監査局直税部長や主税局長を歴任し、

官僚として政策運営にあたりますが、昭和20年(1945年)に連合軍司令部(GHQ)が提案した割当課税に反対して主税局長から、大蔵省造幣局長となりました。

昭和22年(1947年)、大蔵省を辞職し、翌年に衆議院議員に初当選(旧京都府二区)。 その後、12回の当選を果たしました。この間、通商産業大臣(第二次岸内閣)、自由 民主党幹事長、同総務会長、北海道開発庁長官(第一次佐藤内閣)、法務大臣(第三 次佐藤内閣)を歴任するなど活躍しました。特に、幹事長時代には池田勇人内閣を支 えて所得倍増政策を推進しています。また、昭和48年(1975年)には、党籍をはな れて衆議院議長に就任し、公平な国会運営に尽力しています。

政治活動のかたわら、読書家・文筆家としても知られ、『政治家の歳時記』・『政治家のつれづれ草』・『私の履歴書 - 牛のあゆみ』・『現代政治の課題』・『政治家の方丈記』などの著作や、十二支に関する膨大な遺稿を残しています。

昭和56年(1981年)、現職議員のまま心筋梗塞のため自宅で逝去しました。享年75歳のことです。同日に旭日桐花大綬章を贈られました。昭和58年(1983年)、宮津市立前尾記念文庫が設立され、約4万冊の蔵書が一般公開されるとともに、同氏の遺稿は『十二支攷』として出版されています。

足立 久兵衛 ■aだち きゅうべえ 湖口 小左衛門 ■こぐち こざえもん ■



足立久兵衛氏と湖口小左衛門氏 は、江戸時代に「かつみ」(離湖) から最短距離の万畳山の下をくり 貫いて湖の水を海に流す開削工事 を実現させました。この事業の完 成により新たに田が開かれ、また 近隣の水田が冠水の被害からまぬ がれるようになりました。

足立久兵衛氏は寛永3年(1626 年)、網野の島溝川村の出身で、

湖口小左衛門氏は離湖に近い小浜の湖口に住んでおり、生没年は不明ですが同時代を 生きた人です。

延宝2年(1674年)、「かつみ」の水が、大雨のたびにあふれ、周辺の田んぼの稲 がそのたびに被害を受けていたために、「かつみ」の水を海に流すトンネルを作るた めに、足立久兵衛氏と湖口小左衛門氏は2人で協力して、海側と湖側から開削工事を 開始しました。

当時はまだ人力での作業であり、海の風浪も激しく、のみと金づちによる手掘り作 業は困難を極めました。そして2人の苦労の末に延宝4年(1676年)、トンネルの掘 削に成功します。高さ3尺5寸(約1メートル強)、巾3尺(約1メートル弱)で、 延長3百数十間(約600メートル)のトンネルの工事が完成しました。

工事により新しくできた新開田は17町歩、冠水から免れた耕地は15町歩にも及んで います。

このトンネルの川を地元では、「マブ」また「樋越」とも呼んでおり、その後、明 治18年(1885年)にこの拡張工事が実施されました。また昭和27年(1952年)には 新樋越川の造成工事も実施され、昭和34年(1959年)に完成しました。

江戸時代に「マブーの事業が行われた背景には、新田開発を奨励する藩政が大きく 働いていました。当時、島溝川村は宮津藩領であり、小藩である宮津藩の財政も決し て楽でなく、農民に対して重い年貢が課せられていました。藩としては新田開発をし て少しでも年貢の収入をあげる必要がありました。全国的にみても江戸時代初期から 各地で新田開発が大規模に行われています。正徳2年(1712年)足立久兵衛氏はその 生涯を閉じました。享年85歳のことです。

看屋佐平治 Jane 3011 -----



峰山町常立寺にある墓

網屋佐平治氏は、江戸時代の人で丹後縮緬 の始祖として知られています。

氏は享保5年(1720年)西陣から帰り、 はじめて『ちりめん』を織り出したと言われ ています。

丹後では、絹紬などのほかに、精好織(せいごおり)という高級品を織っていました。 精好織は高級品で大衆向きではなかったため、 利益も少なかったと言われます。氏は、当時 流行していた京都西陣のお召縮緬の秘法を修 得しようと決心して、小西村(峰山小西)の 禅定寺の聖観音に断食をして神仏に祈願し、 お召縮緬の技術を得たいと西陣の織屋に奉公

します。お召縮緬の研究に没頭して、試行錯誤を繰り返しながら工夫をしますが、なかなか思うような織り物を織ることができません。

氏は再び、西陣に行き、糸綺屋に住み込み糸撚りの車の仕掛けを工夫しようとしますが、糸撚りは土蔵の中で主人と番頭のみが立ち入りを許されているのでその仕組みがわかりませんでした。ある時、佐平治氏はこの土蔵へ忍び込み、その仕掛けとやり方を悟り、故郷の峰山に帰り、享保5年(1720年)糸撚り車を組み立て、ようやく縮緬の製造に成功したと文書は伝えています。

氏がはじめて使用した手織機で織り出した布片は禅定寺に納められ、寺宝として保存されています。織りあげられた縮緬は、京のお召縮緬よりも厚手でシボの高い織物であり、全く峰山独自の丹後縮緬でした。氏は貧しい者には、喜んで織り方を教えたと伝えられ郷土の人から尊敬され、丹後縮緬の製織はまたたく間に丹後に広まっていきました。佐平治氏の功績をたたえて、峰山藩五代藩主高長は自筆の『御召縮緬ちりめんや』の文字を染め抜いた紺暖簾を与えたと伝えられています。この時より絹屋佐平治氏は、名前を森田治郎兵衛と改めました。その業績を讃える『丹後ちりめん始祖 森田治郎兵衛翁発祥地』の碑が峰山町織元に建てられています。

一木禅師 **いちぼくぜんじ



一木禅師陶芸作品(個人蔵)

一木禅師は、江戸時代の網野浜詰出身の名僧で、文珠智恩寺の11世座主であり陶芸でも優れた作品を残しています。

一木禅師は、明和8年(1771年)、木津ノ 庄浜分の東長五郎家に生まれました。幼い 頃、久美浜の湊村の海隣寺に小僧として預け られ、修行の末、文珠の智恩寺11世座主とな りました。人徳教養が高く、仏の教えを説き 多くの人に崇敬され、朝廷より紫衣を賜りま した。紫衣は高徳の僧侶に対して朝廷が与え たもので、紫の着用の勅許は朝廷に与えられ

ていました。

一木禅師について次のようなエピソードが伝えられています。ある時、浜詰の年寄り夫婦がとれたそば粉を和尚のもとに持っていこうと相談し、おじいさんは5升、おばあさんは3升でよいと主張した結果、おじいさんの考え通りに5升のそば粉を智恩寺に持参しました。すると和尚は、3升だけ受け取り2升を持ち帰るように言われたとのことです。その話を聞いた村人達は、和尚の人の心を読む術に不思議がったということです。

また、禅師は陶芸に秀で、楽焼の優れた作品を数多く残しています。香炉、茶器や動物の置物だけでなく、薬師如来像、地蔵菩薩像などの仏像の作品も造像しており、特に仏像の作品には氏の僧侶としての魂の込められた作品が伝えられています。陶芸家としての弟子も多く、その作品も各地に残されています。

一木禅師は、天保7年(1836年)生涯を終えました。65歳のことです。

初代 松助 二代長谷川松助 『にだい はせがわまつすけ』

■ しょだい まつすけ



金刀比羅神社猫像(初代松助)

松助氏親子は、江戸時代末期から明治時代 の石工であり、親子二代にわたり丹後地域に おいて石仏、宝篋印塔、狛犬などの多くの優 れた石造物を残しました。

初代松助氏は、安永8年(1779年)に鱒 留村に出生し、両親が幼少の頃に亡くなったた めに、母親の親元に引き取られ養育されました。 その後、天明7年(1787年)に全徳寺の4 世大真周和尚の紹介で、京都の石材産地であ り、多くの石屋がある山城国愛宕郡白川村の 石屋に丁稚奉公することになりました。当時 の石屋は、徒弟制度のもとにあり、親方と職 人である奉公人の間で職業技術伝承を行い、 併せて礼儀作法などの人格的な養成も行われ ていました。

松助氏の修行の地である白川村は、江戸時

代から幕府領でありました。白川流域一帯は花崗岩が多く、その砂が白く美しいこと からこう呼ばれており、この石材を材料にして石工を営む人も多くいました。

特に京都の町には極めて多くの寺があるために、墓石はもとより灯籠などの石造物 の需要も多く、石材工業発祥の地として、石工職人も多く繁栄していました。この地 で寛政11年(1799年)頃、20歳頃まで修業しています。さらに寛永11年(1800年) 大阪長堀石浜で仲間2人と石屋を開業したと考えられます。

文化12年(1815年)、松助氏は郷里鱒留村で石屋を開業するために帰村しました。丹後 各地の石材について調査を行い、鱒留村大ベラ石が安山岩質の良質の石である事を発見し、 多くの石造彫刻を制作。嘉永6年(1853年)に生涯を閉じました。2代目松助氏は天保 3年(1832年)に生まれ石工として活躍し、明治41年(1907年)亡くなっています。

丹後地域で石工松助氏が製作した石造物には常立寺(峰山町吉原)、福昌寺(弥栄町 黒部)、天長寺(宮津市日ヶ谷)の子安地蔵、金刀比羅神社の一の鳥居、木島神社(金刀 比羅神社末社)の猫像、地蔵院(大宮町上常吉)の地蔵菩薩立像などの名品があります。

特に松助氏親子が製作した子安地蔵は、左手に丸々と肥えた乳児を抱え、その乳児 に宝珠を持たせたもので、松助氏の子安地蔵の特徴となっています。

莆田 善兵衛 かまた ぜんべえ



綿縮緬始祖蒲田善兵衛記念碑

蒲田善兵衛氏は、幕末から明治にかけて縮 緬業に従事し、綿縮緬を考案して綿縮緬始祖 として、丹後の機業の推進に大きな役割をは たしました。

氏は文化10年(1813年)大宮町口大野の 出身で、代々縮緬業に従事していました。し かし慶応年間海外貿易がしだいに盛んとな り、その影響で生糸が高騰していき、その上 舶来の絹布は価格が安かったので、丹後縮緬 は売れ行きが不振となり、機業界は景気が衰 退していきました。

この時、氏は京阪地方に行商しながら、各 地織物に舶来の綿糸を使用するのを見て、こ れを縮緬に応用することを考案しました。た て糸に生糸、よこ糸に綿糸をとする製織法に

取り組んで苦労の末、ついにその方法を考案して美麗堅緻な綿縮緬の生産に成功しました。時に慶応3年(1867年)のことです。

この綿縮緬は一見生糸縮緬とよく似ており、しかも価格が安かったことにより、好評を博し販路を拡大していきました。丹後の機業はこれにより再び隆昌を取り戻しました。その後、盛衰はありましたが明治の中期になり上州に改良の綿縮緬が生産されると、これと並んで丹後もすこぶる活況を呈しました。明治19年、前半期には機数1,089台、製造額12万8,180反の多きに達し、機業界に巨利をもたらしました。

しかし、氏はこれを見ることなく明治11年(1877年)8月1日、病気のため生涯を閉じました。しかし、この綿縮緬も大正時代に入ると次第に衰退していきました。

これらの新製品は時代の要請により、生まれやがて消えていきましたが、一時期の 丹後の機業を支えていたことも事実です。

松本 重太郎 電力的と じゅうたろう



松本重太郎氏は渋沢栄一と肩を並べる明治 財界の巨頭で、「関東の渋沢、関西の松本」 と称せられました。

氏は弘化元年(1844年)、父松岡亀右衛門、母美代の第3子として間人に生まれました。 亀蔵と名づけられ、10歳の時、郷里間人を出て京都の呉服屋の菱屋勘七で3年奉公をした後、安政3年(1856年)、大阪の絹屋利八という呉服屋につとめました。当時儒学者小田 質陽について勉学にも励んでいます。

明治3年(1870年)23歳の時、独立して 反物商「丹重」を営み、この時に姓を松本、

名を重太郎と改めています。時代を読み、ラシャの販売等で成功し丹重商店は大きくなりました。

松本氏は銀行と鉄道の重要性を認識し新しい事業を起こしました。銀行では、明治 11年百三十銀行を設立し、明治20年に大阪共立銀行(浪速銀行)、明治27年に日本貯 金銀行、明治29年に名古屋明治銀行を設立しています。

鉄道については大阪市と堺市を結ぶ鉄道建設を計画し、明治19年大阪と堺間の鉄道が開通しました。日本で初めての私鉄である南海鉄道で、社長として事業を拡大していきました。綿糸製造では、明治15年大阪紡績会社を設立し、明治29年日本紡績会社を設立しています。明治25年大阪吹田にビール工場を設立し、「アサヒビール」として売り出しました。このように、大阪紡績会社、日本紡績会社、京都製紙会社、大阪麦酒会社、日本火災保険会社、日本製糖会社、毛斯綸織会社、明治炭坑会社、日本教育生命保険会社、大阪毎日新聞社、阪堺・山陽・南海・阪鶴の各鉄道会社、大阪運河会社等の多くの創立に尽力し、これらの社長・重役に就任、また百三十銀行・大阪共立・大阪興行銀行等をおこし、関西実業界の重鎮となっています。政界でも活躍し、明治29年(1896年)大阪府第2区から衆議院議員に当選、大阪港の築港に貢献しました。

大正2年(1913年) 6月20日、生涯を閉じました。享年70歳のことです。

稲葉市郎右衛門英裕。いなばいちろうえもん ひでひる。 稲葉市郎右衛門景介 『いなばいちろうえもん けいすけ 』



12 代英裕



13 代景介

稲葉市郎右衛門英裕氏は、久美浜の豪商稲葉本家の 12代当主で、明治時代前期に府会議員、国会議員を歴 任し、自由民権運動に関わるなど名望家として重要な 役割をはたしました。

稲葉市郎右衛門景介氏は、13代当主で府会議員を歴 任し、あわせて丹後鉄道敷設にかかわり私財を投げ打っ て地域貢献しました。

稲葉家は「糀屋」を家号とし、享保20年(1735年) からは、幕府の公金預かり所である掛屋を営み、近隣 諸藩の金融を独占する豪商となりました。稲葉家は明 治14年(1881年)に京都府下最大の地主となり、豪商 稲葉本家は主屋、宝蔵等の建物が国登録文化財となっ ています。

12代稲葉市郎右衛門英裕氏は弘化3年(1846年)に 父稲葉市郎右衛門太訓、母りうの次男として久美浜村に 生まれ、明治3年(1870年)に家督を相続しました。幼 少の頃より出石藩の儒者島村弘輔と土岐新之承について 漢学を学んでいます。明治2年久美浜県勧産御用掛頭取 となっています。5年以降豊岡県・京都府下で区戸長等

を歴任し、12年京都府会議員となり、自由民権運動と関わり指導的役割を果たしました。 明治27年には衆議院議員となっています。29年久美浜銀行を設立し、32年に京都府 農工銀行取締役に就任し、大正4年(1915年)生涯を閉じました。

漢詩、和歌、俳句などへの造詣も深く、弟宅蔵とともに丹後地域の遺跡探訪を行い 函石浜遺跡の発見にも大きな役割を果たしました。

13代稲葉市郎右衛門景介氏は、明治15年(1882年)に父市郎右衛門英裕、母きせ の次男として生まれました。府立第一中学校、早稲田大学を卒業し、父の死去ととも に家督を継いでいます。久美浜銀行頭取となり、昭和8年から久美浜金融株式会社社 長、大正8年には府議会議員となり、昭和3年、10年、11年に議長を歴任しています。 大正15年から昭和3年久美浜町長を務め、昭和4年(1929年)宮津線豊岡・久美浜 間が開通していますが、敷設のために私財を投げ打って推進に努めました。昭和29年 (1954年)に生涯を閉じました。享年72歳のことです。

松田道

■ まつだ みち / |



松田道氏は、留学してアメリカの女子大学 に学び、同志社女子専門学校の教授として、 そして初の女性校長として女子学生の教育に 生涯をささげました。

氏は明治元年(1868年)に峰山に生まれました。峰山小学校を卒業して京都府立第一女学校の前身である女紅場に入学しました。当時はまだ汽車はなく、峰山から福知山廻りで三日間、父親に連れられて京都へ上京します。その時の様子を次のように回想しています。

「こんかすりの着物に赤いメリンスの帯を しめ、父の後からトボトボと途中、石に腰掛 けて休んだりして京都につきました。福知山

の宿ではほの暗い行燈の下、父は私の足に焼酎をこすりつけて呉れましたのをよく覚えております」。

京都の鴨川のほとりでの寄宿生活は楽しい生活だったと記述しています。「毎夜一室に集まり机を並べて復習や予習をするのですが、ランプでなく行燈を幾十となくともして本を読んだり習字をいたしました」。

その寄宿舎の舎監の田辺先生から「君が名の道ひとすじに学び得て松の操と人に知られよ」という和歌をしたためて短冊に書いて贈られたことを在学中の最もうれしい出来事として回想しています。

そして卒業後、同志社と横浜フェリス校にて英語を学んだ後に、明治16年(1883年)に渡米奨学金をもらいアメリカの女子大学に入学して勉学に励みました。アメリカでの生活は見るもの新鮮にうつり、アメリカの生活習慣や文化に感化されます。「留学生に対して親切に接してもらい、自分の娘と同様に接して束縛せず自由な雰囲気を満喫します。しかし、散歩に出ても自分ひとり勝手に遅れて食事することは許されず、定められた時刻には服装や身だしなみを整え、礼儀正しくして談笑しながら食事をしなければなりません。また日曜日にそろって教会に行くなどの習慣も厳粛な印象として、心に残りました」と述懐しています。帰国して教職に従事し、女子学生を指導します。そして同志社女子専門学校(現在の同志社女子大学)の教授となり、そして女性として初めて校長になりました。

昭和31年(1956年)、その生涯を閉じました。

飯室 岸蔵 ニいむろ きしぞう



研智会 飯室岸蔵(前列右から6人目)

飯室岸蔵氏は明治時代に地域の青年活動に情熱を燃やした青年です。

氏は、明治5年(1872年)3月、京都府熊野郡布袋野村に父九郎左衛門、母ときの長男として生まれました。父はこの地方随一の地主で、村長・府議会議員などを歴任した政治家でした。岸蔵氏は、

大阪の専修学校で学び、家を継ぐために進学を断念して明治19年(1886年)に帰郷しました。当時は自由民権運動の高揚した時期で、氏もこの影響を受けています。明治21年には、同人誌「目ざまし」を発刊し、世の中を風刺した内容で、その後「国民之燈」などに名称を変更しています。岸蔵氏16歳の時です。彼は徳富蘇峰の「国民之友」や志賀重昴の「日本人」などから特に「進歩的平民主義」という徳富蘇峰の思想に深く共鳴していました。明治22年17歳の年に岸蔵氏は「川上青年研智会」を結成しました(会員約40名。1905年まで)。学術の研究・風紀の矯正等を目標に、同人誌「明治嬢」を刊行し、講演会などを行っています。研智会はまず、正言をはき、気をもって不正をたち、もって足元の川上村から変えていこうとし、そのためには歯に衣をきせてものを言ってはならないとします。だから友達はもちろん、村の有力者にでも堂々と意見を述べるとしています。

氏の論文に「保守的貴族主義ヲ排斥」「進歩的平民主義」という記述が示すように、徳 富蘇峰の平民主義に傾倒し、政治的には自由主義者であり、徴兵制度への批判・言論の自由・ 大同団結派弾圧への批判・女性が職業をもつことの必要性などの緒論を展開しました。

明治32年、27歳で川上村長となり、就学児童奨励補助金の制度をつくり貧しい家の児童に教科書、学習用具を貸与したり支給していますが、明治39年に結核で村長を辞任し、2年後には妻と死別しました。

妻の病が「死病」の結核であったために、周囲は離婚をすすめますが、岸蔵氏はそれをうけいれず、自身も結核に犯され闘病生活に入ります。同じく病床にある妻と床を並べ、おとろえていく妻を看病します。

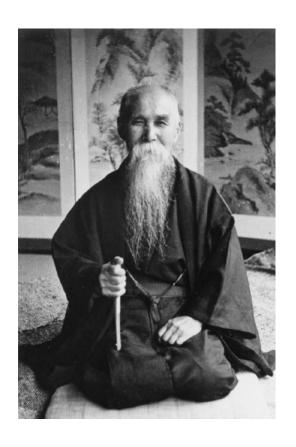
その妻は明治41年(1908年)に命尽きます。

おさへてもせきくる涙とどめあえむ

声立てかねて我胸に泣く

明治4年(1909年)、飯室岸蔵氏は幼いわが子の身を案じながら37歳の生涯を終えました。

谷源蔵 ■tic ifleij ■



谷源蔵氏は、郷里のために敬老会を創始し 東山公園を造成するなど地域振興に努め、郷 土史の研究も行い「間人民族の研究」などを 著しました。

氏は明治5年(1873年)、相見幸八家の四男として誕生し、谷栄吉家の養子となりました。17歳の時、大阪の羅紗商松村真平(松本重太郎氏の妹婿)の店に勤め、たまたま羅紗の取引商務のため、日本海を越えてウラジオストックの土地を踏んだ時、この地こそ将来自分の雄飛する土地であると心に決めます。

明治28年(1895年)、独立して同地ウラジオストックのセメノフスカヤの街角に店舗を構え、木材を中心に貿易商を経営しました。なお越前の鶴賀港天満区に出張所を開設する

などし、事業は年を追い発展しました。

氏はまた、愛郷の志篤く、郷里のため私財を投じて町民の喜びを自分の喜びとし、 大正9年から自力で敬老会を創始し、その回数は20余回を重ねました。大正10年町 民の憩いの場として東山公園を造成し、桜樹を植え、間人町民に活用され地域の振興 に力を注ぎました。その他、各種の供養等を建立することも行っています。

氏の業績として、そのほか郷土史の研究があります。昭和12年から筆をとって余生を過ごされ、厳山生の筆名で間人町報に連載された「間人民族の研究」「間人の名称の考証」は、風俗、習慣などを主に扱い、民俗資料として貴重であり、町史をいろどり郷土研究の先鞭をつけたものとして重要な文献となっています。

昭和32年(1957年)2月15日、その生涯を閉じました。享年84歳のことです。菩提寺は京都曹洞宗無学寺、墓所は東山若王寺にあります。

吉村 伊助 ****



吉村伊助氏は、大正から昭和の初期にかけて丹後縮緬の国練検査制度を創設するなど、縮緬産業の発展に寄与し、また吉村財団を設立し学資給付や社会救済活動を推進するなど地域貢献をしました。

氏は明治6年(1873年)に城崎郡日高村 太田治右衛門の二男として生まれました。小 学校卒業後、京都市西本願寺経営学校に学び、 明治29年吉村伊助(弥右衛門)の二女、千 代の婿養子となりました。

30歳で家督を相続し新太郎を伊助に改名します。明治40年には峰山町長に就任し、 42年には丹後縮緬商組合初代組合長に就任しました。大正5年峰山町長を退職し、大 正8年(1919年)、財団法人吉村財団を設立しました。

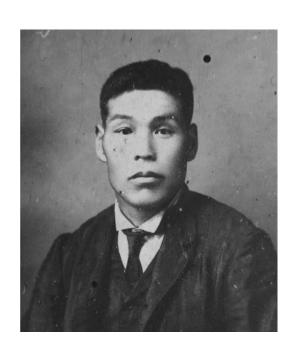
吉村財団は、人材の養成及び社会救済の目的をもって組織され、学資給与や生活救助、また青年団への地方改善費の提供、京都府立工業高校の充実などの事業を行いました。以後昭和41年に解散するまで活動を行っています。

丹後縮緬については、昭和3年(1928年)から国練検査制度が創設され、これが 1つの契機となり丹後縮緬産地は飛躍的な発展を遂げることとなりました。この制度 の設立に吉村氏は中心的な役割を果たし、精錬実施に向けて、大正14年「丹後縮緬精 錬倉庫株式会社」を設立し社長に就任しています。

丹後縮緬は、明治中期以降、地元では、ほとんど精錬されず京都の問屋へ出荷され、京都の問屋が精錬業者に出すのが現状でした。従って精錬後に「繊難」が発見され、製品の難引や返品が行われ悪用する例も多く見られました。国練検査制度は、地元の丹後で精錬・検査することにより縮緬業者の製品重量のごまかしや京都の問屋との不正取引をさせないことをねらったもので製品の質の向上と商売の信用を高めることとなりました。丹後縮緬の歴史で大きな転換期となり、この国練検査の開始は、飛躍的に発展する原動力となりました。

政治家としては明治40年に峰山町長、大正10年、48歳で峰山町議会議員、12年京都府会議員に当選し議長に就任し、13年に第15回衆議院議員選挙において国会議員となりました。昭和3年、第1回衆議院普通選挙にも当選しています。しかしその直後、昭和3年(1928年)3月15日に病気によりその生涯を閉じました。享年55歳のことです。

永浜 宇平



永浜宇平氏は、農業のかたわら大正から昭 和前期にかけて丹後の多くの郡町村誌を編さ んした郷土史家です。

氏は明治13年(1880)9月26日、大宮町 三重に生まれました。父は永浜甚蔵、母はも とで生涯を通じて郷土史を深く研究し丹後地 方の先覚者として業績を残しました。

「その郷土史研究に情熱を燃やした原因として、神社の由緒を明らかにしたいということが本来の骨子であるから畢竟私の半生を棒に振ったのは神社への奉納であると言ってよ

い」と自身の自伝『言行三東』で記しています。この言葉通りに各地の多くの神社の 復興にも尽力しています。永浜氏の本業は農業であり、農業に従事しながらこれらの 郷土史の研究に没頭し多くの業績を上げています。

氏は明治33年~34年頃に東京の哲学館(現在の東洋大学)の井上円了博士のもとで哲学や妖怪学を学んでいたようです。その後渡米や日露従軍などの後、明治40年代には郷里に戻っています。

氏は大正に入るころより三重の郷土誌編さんを企画し、調査をはじめました。足かけ10年をかけて『三重郷土志』の原稿を執筆し、大正11年に発刊しました。これを皮切りに、以後、10冊におよぶ郡町村誌を編さんし、さらに丹後史料叢書などを刊行しています。編さん執筆したものには、『与謝郡誌』(大正13年)、『丹後宮津志』(大正15年)、『石川村誌』(大正15年)、『養老村誌』(昭和3年)『丹後史料叢書』5冊(橋本信治郎、小室万吉と共編(昭和2年)、『丹後地震誌』(昭和4年)、『吉津村誌』(昭和5年)、『加悦町誌』(昭和6年)、『難波野郷土誌』(昭和6年)、『岩屋村誌』(昭和8年)などがあり、『丹後郷土史料集』第一輯、第二輯(木下幸吉編)の改訂を行いました。この他にも多くの論文があります。

永浜宇平氏は昭和16年(1941年)生涯を閉じました。享年62歳のことです。戒名は生前に高野山でもらった「愛郷拓道居士」です。原稿をほぼ書き上げながら未完に終わったものには、『日置村誌』、『岩滝町誌』、『峰山町誌』などがあります。

羽田 亨 Bullett Caral



羽田亨氏は、昭和初期の東洋史の学者で西域特にウイグル人の言語歴史文化から東西文化の交流の歴史を明らかにするとともに昭和13年第11代京都大学総長となりました。

氏は明治15年(1882年)中郡五箇村 父吉村和、母コマの四男として生れました。五箇尋常小学校卒業後、峯山高等小学校へ入学し、32年京都府立第一中学校をへて、34年第三高等学校入学、後に中郡長となる羽田信明の養子となりました。

兄吉村盈の話では、「弟は小学校時代から 読書をはじめると、徹夜するほど熱心だっ

た。学校の成績も良かったので、当時の中郡長だった羽田信明氏のお目に留まったのでしょう。一中に入って3年の時、是非ということで養子にいきました」と語っています。

明治37年、日露戦争が始まった年に東京帝国大学史学科(現在の東京大学文学部) に入学し、明治40年東京帝国大学卒業後、京都帝国大学大学院に入学しています。明 治42年、京都帝国大学講師となり、羽田家養女道代と結婚しました。

大正2年、助教授となり、大正11年「唐代のウイグル人に関する研究」により、文学博士の学位を取得し13年、京都帝国大学教授となりました。昭和7年京都帝国大学文学部長となり、昭和11年、帝国学士院会員となり、昭和13年、第11代京都帝国大学総長に就任します。昭和20年、勲1等瑞宝章を受け京都大学総長を辞めます。昭和27年にはフランス学士院からジュリアン賞を贈られています。昭和28年、文化勲章を授与され、昭和29年、京都市名誉市民となっています。

このように羽田亨氏は、丹後に生まれた偉大な学者であり、教育者として大きな足跡を残しましたが、昭和30年(1955年)4月13日、その生涯を閉じました。享年73歳のことです。

『西域文化史』などの東洋史の面において多くの論文を残すなど輝かしい功績を刻みました。また昭和41年に京都市北区大宮に羽田亨博士の功績を顕彰するために羽田記念館が建設されました。

小谷 勝重 acte molif



小谷勝重氏は、昭和において法学博士としてまた最高裁判所裁判官として法曹界において大きな業績を残しました。

氏は明治23年(1890年)12月24日、丹後 町間人の小谷勝蔵の二男として出生しまし た。

大正3年(1914年)、法政大学を首席で卒業、大正5年弁護士試験に合格、大正6年から弁護士業務にたずさわりながら、民法学者富井政章博士の教えを受けています。昭和16年(1941年)、『日本取引所法制史論』の一大論文を完成し、法学博士の学位を得ました。

昭和21年(1946年)、大阪弁護士会長に推され名実ともに法曹界の重鎮となっています。

その間、大正12年(1923年)、大阪府議会に32歳で当選。昭和23年(1948年)8月、日本国憲法の下に発足した最高裁判所の創設と同時にその裁判官に任官され、定年まで実に13年有余にわたり在職しました。その間、松川事件をはじめ歴史に残る数々の事件を手がけています。

囲碁が趣味で日本棋院三段の腕前であり、書道もたしなみ、郷土の間人小学校に自身の軸「責人之心責己、怒己之心怒人」と「任重而道遠」、間人中学校の「少年易老学難成、一寸光陰不可軽」は氏の書であり、その内容は氏の人柄をよく表わしたものです。

昭和33年(1958年)、皇室会議議員となり、同年秋、皇太子妃選考会議にも臨み、 皇太子殿下の御成婚、浩宮様の御誕辰等にもご招待を受けられました。

昭和35年、定年退官後は東京都世田谷区で余生を送っており、昭和38年(1963年) 10月27日、病気のために生涯を閉じました。享年72歳のことです。勲一等瑞宝章を 授けられています。墓地は菩提寺東京、芝の青松寺にあります。

平林 初之輔 ひらばやし はつのすけ



平林初之輔氏は、日本の作家・推理作家・ 文芸評論家。プロレタリア文学運動の理論家 として知られています。

明治25年(1892年)11月8日、京都府竹野郡深田村字黒部に、父万蔵、母うめ、姉2人、弟1人、妹2人の6人兄弟の長男として生まれました。

明治43年 (1910年)、18歳で京都府師範 学校に入学し、大正2年21歳で師範学校を退 学し、上京して早稲田大学文学部英文科に入 学し、片上伸や吉江喬松らと親しんでいます。 大正6年 (1917年)、25歳で早稲田大学卒業

し、アテネ・フランセでフランス語を学びました。

大正7年(1918年)、26歳でやまと新聞に入社し『世界大戦史』の編集に従事しています。同紙の文芸時評欄を担当するとともに、ユゴーなどフランスの小説を翻訳して掲載しています。ドストエフスキー文学に心酔し、大正9年、労働争議を契機に同新聞を退社し、青野秀吉、市川正一と交際が始まり、ともに国際通信社に就職しています。氏は外電の翻訳に従事し、社会主義・マルクス主義に関心を持ち研究をすすめました。

大正10年(1921年)29歳で相沢こまと結婚し、このころ創刊された雑誌『種蒔く人』に関係し、当時勃興しはじめたプロレタリア文学を理論化することに力を尽くしました。大正13年にルソー『エミール(上下2巻)』翻訳しており、この頃より探偵小説に興味を持ち始めます。『私の要求する探偵小説』を発表し、大正14年にルソー「民約論」翻訳し、『自然主義文学の理論的体系』を刊行しています。昭和元年、博文館に入社し、『太陽』誌の編集主幹となっています。昭和3年「プロレタリア文学運動の理論的及び実践的展開の過程」、昭和4年37歳で「政治的価値と芸術的価値」を発表し、芸術作品の価値について文壇に大きな論争が起こりました。

昭和6年(1931年)、フランスに映画研究のため留学中、パリ市内で急死しました。 わずか39年間の生涯に多くの仕事を成し遂げました。

藤原勘治。ふじわら かんじ



藤原勘治氏は、ジャーナリストでありライ病救 済事業で貢献しました。

氏は明治28年(1895年)6月29日、丹後町間 人藤原豊蔵の長男として出生しました。宮津中学、 東京第一高等学校から東京帝国大学文学部社会学 科にすすみ、大正12年卒業しました。同年10月東 京日日新聞社(現毎日新聞社)に入社し、昭和20 年には毎日新聞社調査室長、昭和22年同社工務局 長、翌年12月東京本社編集主幹、毎日新聞社取締 役に就任しました。

昭和24年から28年まで取締役として活躍のかたわら西部本社の代表と労務も担当しました。同38

年社友となりましたが、その前年の昭和37年12月、財団法人アジア救ライ協会が設立され、その常任理事となり昭和42年理事長に就任しました。

この協会はインドを中心としたアジア諸国との国際協力に寄与するために、アジア諸国におけるライ病の基礎的研究と医療活動を行う事を目的として設立されました。その事業に必要な理解と協力を求めるため国内だけでなく世界各国への宣伝と啓発活動につとめました。アジア未開発国のライ病患者の悲惨さは目をおおうものがあり、昭和42年1月、インドに救ライセンターを設立し、各階層、各種団体に呼びかけ資金調達につとめ、その設立事業に専心されました。この国際的事業に貢献した氏の功績は多大です。

昭和45年、父と母の法要に帰郷した時、その供養記念として町役場に丹後町長を訪ね「幼少のころ母から金澤庄三郎編さんの『広辞苑』を買ってもらって、手にした時の感動は一生忘れない」と話し、郷土の青少年に本を読む費用に使ってほしいと百万円を寄付し、丹後町の図書館に「豊淑文庫」が設置されました。さらに拡充して、間人小学校、間人中学校にもこの豊淑文庫を設置するなど郷土の教育にも寄与しています。

昭和47年(1972年)11月28日、病気のために生涯を終えました。享年77歳のことです。氏は新聞界と救ライ活動に捧げ、国際的な存在として生涯を閉じました。生前、表彰や叙勲を強く固辞したため勲二等瑞宝章を死亡叙勲として授与されています。



中村遥氏は大阪水上隣保館、養護施設の建設運営など社会福祉事業にその生涯を捧げました。

氏は明治36年(1903年)、中郡五箇村に中村寅之助、母トヨの次男として生まれました。幼少期は相当な腕白で家族の者をてこずらせたということです。

五箇尋常高等小学校を卒業し丹波村尋常高 等小学校3年卒業後、16歳で同志社中学校3 年に編入しました。苦学しながら日本大学法 学部予科に入学しますが、体調を崩して五箇 村に帰り、丹波小学校にて代用教員となりま

す。昭和2年に再び同志社大学文学部神学科に入学し卒業後、堺キリスト教会牧師として布教活動に従事します。当時日本は昭和初期で戦争へと進んでいく時期であり、 貧困者も多く艀で働く水上生活者なども多く生活が不安定で不就学児童の子供がたく さんいました。

こうした現状の中で、氏は昭和6年(1931年)に妻八重子とともに不就学の子が教育を受けられるように安部川のほとりに漁師小屋の2階を借りて、4名の子供との生活を始めました。『水上子供の家』の創設であり、『大阪水上隣保館』の前身となるものです。その後、昭和8年には3階建ての借家で、約40名の子供を収容し、児童ホームや授産事業、産院眼科診療などを拡大していきます。10年後には100名を超す人数となっていきました。

しかし、昭和20年に空襲によりこれらの施設は全焼しますが、21年には地域のために山崎保育園を開設し、26年に天王山山麓に養護施設『遥学園』を開設します。その後、山崎幼稚園、乳児院、キリスト教保育専門学院、高槻市藤の里保育園、キリスト教保育専門学校を開設するなど社会福祉施設の充実と普及につとめていきました。

「生きることは愛することである」は氏の信念としていた言葉であり、まさにその 言葉を実践した一生でした。

昭和52年(1977年)、その生涯を閉じました。享年73歳のことです。

小牧源太郎 Cate IFLERS



小牧源太郎氏は、日本美術史上屈指のシュルレアリスム(超現実主義)の代表作家です。 氏は明治39年(1906年)、中郡大宮町口大野村に生まれました。生家は父の代からはじまる縮緬問屋で、長姉と5人の男兄弟の次男として誕生しました。宮津中学で寄宿生活を送りながら学び、次第に文学や思想的関心が育まれ、様々な読書に明け暮れる日々を過ごしました。その後、立命館大学で学び、哲学

関係の書物を何の拘束も受けずに読みあさったことなど、自由で恵まれた青春時代をおくることとなります。

昭和8年(1933年)、27歳の時に「巴里新興美術展覧会」に感銘を受け、シュルレアリスムの存在を知り、昭和9年、28歳の時に「須田国太郎展」を見て影響を受け、独立美術京都研究所で、本格的に絵の修行を積みました。氏は西洋スタイルに日本の土俗的信仰を加味し、宇宙観や生命観を吹き込んだ独創的な画風で一時代を築きました。

昭和32年(1957年)にサンパウロ近代美術館で個展を開催し、昭和36年、国画会に会員として入会し、毎年国展及び関西国展に連続出品しました。昭和38年(1963年)に57歳で紺綬褒章を受けています。昭和52年(1977年)に京都市文化功労者、昭和55年に京都府美術工芸功労者として表彰されました。

昭和62年(1987年)、画集「小牧源太郎・シュルレアリスムの実証《貌》」を刊行し、昭和63年には「小牧源太郎展〈非合理の美を求めて〉」(伊丹市美術館)を開催しています。

そして、昭和62年(1987年)肺炎のためその生涯を閉じました。享年83歳のことです。その後、平成8年(1996年)、「小牧源太郎遺作展-増殖するイメージ」(京都国立近代美術館)が開催されました。

小牧源太郎画伯の色鮮やかな作品は、見る人を新鮮で強烈なイメージと空想の世界にいざなってくれる作品が多く、氏の描く心象風景をかいま見せてくれる独自の画風を築いて絵画に新風を吹きこみました。

田村 しげる たむら しげる



田村しげる(ブロマイド写真)

田村しげる(本名 茂)氏は、昭和初期の 作曲家で「白い花の咲く頃」をはじめ多くの 名曲を作曲しました。

氏は明治41年(1908年)12月20日に峰山町白銀、田村愛輔の四男として生まれました。 大正10年(1921年)、峰山小学校尋常科を卒業し、大正14年宮津中学校卒業、その後上京し武蔵野音楽学校に入学、昭和6年武蔵野音楽学校本科を卒業しました。

昭和6年ビクターレコードから「酔って 笑って」を作曲し作曲家デビューし、翌年キ ングレコード専属作曲家となりました。

昭和9年「潮来の雨」(村松又一作詞)を 作曲し、松島詩子の歌でキングレコードから 発売されヒットしました。昭和10年「丹後 縮緬小唄」(時雨音羽作詞)を作曲し、東海

林太郎 新橋喜代三の歌でポリドールから発売されています。

昭和24年(1949年)「白い花の咲く頃」(寺尾智沙作詞)を作曲し、NHKラジオ歌謡で岡本敦郎が歌い放送され、コロンビアで発売され好評を博しました。この曲により妻で作詞家の寺尾とともにコロンビア専属となっています。このヒット以後、菅原洋一、ポニージャックス、水原弘、北島三郎、寺内タケシのレコードも発売されました。

昭和28年「ちりめんタンゴ」(藤浦洸作詞)を作曲し、青木光一、奈良光枝が歌ってコロンビアから発売されました。

故郷の「間人小唄」、「久美浜小唄」、「長岡小学校歌」なども作曲しています。

田村しげる氏の代表曲として「山は夕焼」(昭和9年9月)「岡田千秋作詞、東海林太郎歌」、「母をたずねて」(昭和9年11月)「時雨音羽作詞、東海林太郎歌」、「ふるさとの母」(昭和12年9月)「梁取三義作詞、松島詩子歌」などが良く知られており、作曲したものは400曲以上で、日本の名曲を数多く作曲しました。

平成4年、丹後文化会館前に「白い花の咲く頃」の歌碑が建立されました。

■与謝 蕪村 ■よさ ぶそん ■



与謝蕪村氏は、江戸時代中期の俳人、画家として有名です。享保元年、大阪市都島区毛馬町に生まれたと伝えられますが、一説には母親が与謝郡字与謝出身とも伝えられています。丹後に縁が深く宝暦4年(1754年)から3年余り丹後で居住し、画業に専念し画家としての実力を身につけました。

20歳の頃、江戸に出て早野巴人に師事し、 俳諧を学びました。巴人没後は下総国結城の 砂岡雁宕のもとに寄寓。俳聖松尾芭蕉に憧れ、 その足跡を辿り東北地方を遊歴しています。

宝暦4年(1754年)、39歳の折に丹後を訪

れ、宮津見性寺に寄寓して3年余りを丹後で過ごし、俳諧よりも画道の精進に努めた 生活をおくりました。丹後各地にはこの丹後時代の蕪村氏が描いた作品が残されてお り、この時期に描かれた氏の作品は高く評価されています。その後、京都に居を構えて、 宝暦10年(1760年)頃からそれまで名乗っていた「谷口」姓を改めて「与謝」姓を 名乗るようになりました。

無村氏は俳諧作者として、独創性を失った当時の俳諧を憂い、芭蕉当時の作風に立ち返るべきとする「蕉風回帰」を唱えた人でもありました。また、画家として、その画風は非常に多彩で生涯を通じて大きく変化し、独自の画風を確立して、池大雅らとともに日本の文人画大成に大きく貢献しました。

そして、天明3年(1783年)、京都下京の居宅で生涯を閉じることとなりました。 享年68歳のことです。墓所は京都市左京区一乗寺の金福寺にあります。

名句「夏河を越すうれしさよ手に草履」は楽しかった少年時代への憧憬をこめて読んでおり、与謝野町に流れる野田川を題材にしたと言われています。

吉田 新兵衛 よしだ しんべえ 吉田 為次郎 よしだ ためじろう



平地地蔵尊(大宮町上常吉) 吉田新兵衛らの供養のために天保4年に 建立されたと伝えられる。

吉田新兵衛氏、吉田為次郎氏は、文政5年 (1822年)に宮津藩で起った百姓一揆の中心 的人物です。吉田新兵衛氏は、現在の京丹後 市大宮町常吉の生まれ、旧名を鈴木滋蔵とい い、その弟為次郎氏は喜右衛門を名乗り、石 川村の吉田に養子に入っています。

江戸時代後期の文政5年(1822年)12月、 当時の宮津藩は慢性的な財政窮乏に陥っていました。そこで、藩財政立て直しのために藩 政の中枢にいた沢辺北溟が宮津町在の富裕者 25名を選び、彼らに藩財政の運営を任せる 一方、領内の富裕者に献金を求め、領民に対しては人頭税である「万人講」を課したため、 領民の反発をかって一揆が勃発したと言われています。

一揆は12月13日夜、現在の与謝野町石川 と山田の境で蜂起し、加悦谷はもとより藩内 全域に広まり大庄屋などへの打ちこわしに発

展しましたが、18日昼頃には終結しました。

一揆の首謀者とされる石川の吉田新兵衛氏と為次郎氏が、一揆を決意するに至った 経緯としては、宮津藩士である関川権兵衛から為次郎が、万人講の日銭の一部が大庄 屋や手組の役得になっていることを知らされ、沢辺をはじめとする勝手掛役人もその ことを示し合わせていたということを聞いて知ったからで、そのことに対して一揆を 起こしたと考えられています。

一揆の終結後、藩による首謀者探索が始まり、ほどなく新兵衛氏と為次郎氏が捕らわれますが、両人は厳しい拷問にも屈しませんでした。藩は、一揆の首謀者は両人であるとして、 文政7年(1824年)4月、為次郎氏は獄門、新兵衛氏は打首に処せられました。

ただ、文政一揆の首謀者とされる吉田新兵衛氏と為次郎氏については、大正時代末頃からその行動が注目され、「義民」として顕彰されるようになり、今日を迎えています。

両人が今なお地域の人々の心に残るのは、その行為が「身を殺して仁を成した」からであり、大正時代末以降は文政一揆を語る上で欠かせない主役となっています。

与謝野 禮嚴 」」との れいごん



与謝野禮嚴氏は、明治時代に社会公益事業に貢献し、また歌人としても知られています。

氏は文政6年(1823年)、現在の与謝野町温江の細見家に生まれ、明治になって姓を与謝野に改めました。その後、禮嚴氏は5年ばかりの修業ののち加悦の浄福寺に入り、弘化4年(1847年)に若狭大飯郡専能寺の養子となります。

嘉永3年(1850年)、禮嚴氏は若狭を出て京都 岡崎の浄土宗本願寺掛所願成寺に入りました。本 願寺は教団維持のため、勤王側についていたこと により、氏は勤王の志士たちと交流が生じ、本願 寺御用僧として主に北陸方面での勤王活動に従事 することとなりました。

そして、明治を迎え、禮嚴氏は京都で明治6年に開業された療病院設立の寄付金勧誘に 奔走し、また東山に湯治療を目的とした鉱泉場建設などの社会公益事業に尽力しました。 明治初期に禮嚴氏が情熱を傾けて参加した社会公益事業は病苦からの救済を目的とする療 病院や鉱泉場で、それは特に貧困者の病苦救済のための施薬施療であったことは浄土僧と しての本領が発揮されており、その先進性は高く評価されることとなりました。

また、氏は大田垣蓮月や天田愚庵などの歌人とも親交があり、生涯に17,100首余りの和歌を残しています。その詠んだ歌は近代短歌成立以前にもかかわらず、すでに新鮮で伸びやかな近代的な歌風を感じさせるものでした。ただ、禮嚴氏の歌が広く知られるようになるのは、四男寛が禮嚴13回忌記念に明治43年に刊行した「禮嚴法師歌集」からのことです。

これらの歌は、後に斉藤茂吉から高い評価を得て「明治初期に出た特色ある歌人の一人」と評されています。

ちなみに、晩年に出生地の与謝郡を訪れた際、

見も聞きも涙ぐまれて帰るにも

心ぞ残る与謝のふるさと

の和歌を残して、明治31年(1898年)に75歳の生涯を終えました。禮嚴は法号で、歌号は尚絅。なお、禮嚴氏の四男寛は後の与謝野鉄幹です。

真名井 純一 まない じゅんいち



真名井純一氏は、明治時代に養蚕と製糸技 術の改良に大きく貢献しました。

氏は文政12年(1829年)、岩滝の山家屋小 室家に生まれ、幼名を利七と称しました。

生家は北前船主の廻船問屋であり、生糸縮 緬問屋でもあった山家屋の本家であり、先代 利七の代には、持船38艘という数の船を有 していました。当時、日本海で最大の北前船 主となっており、出羽酒田の本間家からも瞠 目の存在でもありました。

氏は山家屋を継いだ後、縮緬の原料である 生糸商いのため日本海沿岸各地を歩いてま わりました。その途中、万延元年(1860年) 米沢で最新の製糸技術を学んだことにより、

故郷の岩滝で新たに製糸伝習所を開設し、縮緬の品質を上げるため、製糸技術の普及に努めました。また、蚕種数百枚を羽前から仕入れ、与謝郡内各村に分け与えました。 さらに、桑苗を甲斐に求めて、蚕と桑の品質を上げるために養蚕の改良に全力を尽く しています。

このように、絹織物の原料である養蚕の奨励や良質生糸の製造に努めており、明治 9年宮津の銀細工屋の中本藤右衛門の協力を得て、当時最新と言われていた奥州座繰 器や上州座繰器に様々な改良を加えて新しい真名井座繰器を開発しました。

この新型座繰器によって生産される生糸は、大規模な機械製糸と同格の品質で、外国へ輸出されたので、その使用は全国に及び、わが国の製糸業の発展に大きな足跡を残すこととなりました。このように、真名井純一氏は一貫して縮緬の品質向上を目指して生糸の生産と製糸技術の改良に努め大きな貢献をしています。

明治35年(1902年)、享年74歳でその生涯を閉じました。

岩滝にある板列公園には、真名井純一を偲ぶ彰功碑があります。

小室 信夫 『こむろ しのぶ ―



小室信夫肖像画

小室信夫氏は、明治時代の政治家であり実業家でもあり、民撰議院設立建白書署名、日本郵船会社設立などに大きな役割を果たしました。

氏は天保10年(1839年)、岩滝の廻船問屋である豪商「山家屋」に生まれました。京都に店舗があったことから勤皇の志士たちとも交わりがありました。文久3年(1863年)、徳川幕府の横暴を足利氏に模すために、京都等持院にある足利尊氏の木像の首を切って三条に梟首しました。この時、幕府の追及を逃れるために熊本藩に逃れ逮捕は免れています。元治元年(1864年)、桂小五郎と三条実美の密使として徳島藩に赴きましたが、梟首事件の件で自首しました。慶応4年まで3年余り獄に入ることとなりました。

その後、徳島藩主蜂須賀茂韶の側近となり、明治5年(1868年)、茂韶に従ってイギリスに留学し、そこで岩倉具視より鉄道事業の調査を依頼されます。その後、後藤象二郎、板垣退助、副島種臣、江藤新平とともに「民撰議院設立建白書」を政府に提出しました。

同15年、信夫氏は国家海運の必要性を痛感し、各県を巡回してその必要性を説いて回り、株主を募り日本郵船会社を設立しました。また、鉄道事業では東京青森間の鉄道敷設を建議し、小倉製糸会社、八十九国立銀行、百三十国立銀行、北海道製麻会社、後の山陰線となる京都鉄道会社なども創立しています。そして、明治24年(1891年)には貴族院議員に勅選されましたが、明治31年(1898年)に60歳で病のためにその生涯を閉じました。墓所は東京都台東区谷中の天王寺にあります。



神鞭知常 『京都の自由民権運動』 (丹後郷土資料館) より転載

神鞭知常氏は、明治時代の政治家です。嘉永元年(1848年)、現在の与謝野町字石川の鞭重蔵家に生まれました。その後、父とともに京都に出ましたが、岩滝の小室信夫の勧めもあり医師神山氏の門に入りました。

その後、再び丹後に戻って四辻の生糸問屋に奉公しますが、知常には学問への志が強く、 丹後を出て播州書写山円教寺で漢学の勉学に 励みました。その効あって、再度帰郷して神社 に奉仕していたので姓を神鞭に改めています。

維新の頃、宮津藩主に抜擢されて江戸に出ますが、明治2年神宮司別当を務め、明治6年(1873年)には大蔵省を経て同9年から2年間アメリカフィラデルフィア博覧会の御用掛を務め、帰国後は内務省、大蔵省に勤務

しています。そして明治20年主税局次長を最後に官僚を辞めています。

そして、明治23年の帝国議会が開かれると衆議院議員に選出され、同36年まで7期務めています。満州問題、対露強硬論・主戦論を主張し対露同志会の結成などにも中心的な役割を果たしています。

その間、内閣法制局長官を務め、明治38年(1905年)に生涯を閉じました。享年 57歳のことです。

このように、知常は明治時代国政の中枢に関わる人物の一人であり、政治家として 大きな足跡を残しています。

小室 信介 『こむろ しんすけ 』



小室信介像 (同志社大学小室・沢辺記念文庫)

小室信介氏は、明治時代前期の自由民権運動家であり、「天橋義塾」の設立に大きな役割を果たしました。

氏は、嘉永5年(1825年)、宮津藩士小笠 原忠四郎長縄の次男として生まれ、幼名は鍗 吉や少と称し、後に長道と呼ばれていました。 藩校礼譲館に学び、その後沢辺正修と共に京 都に出て、山口正養に学んでいます。

明治8年、天橋義塾に入り「人材培養」「小学保護の一助」に尽力し、その才を見抜いた 小室信夫の長女と結婚し、小室信介と改めま した。明治10年、西南戦争が始まると天橋義

塾の幹部は相次いで拘留され、信介氏も国事犯の嫌疑で逮捕され入獄されることになります。天橋義塾は教育結社に加えて政治結社の性格を強め、明治17年に解散することになります。

その間、明治12年、信介氏は大阪に出て、自由党の友党である立憲政党に参加し、日本立憲政党新聞社(大阪日報、後の朝日新聞)の主筆となっています。その間各地を遊説し、言論・組織活動にも従事しています。同年4月、板垣退助が岐阜で暴漢に追われた後、信介氏は岐阜末広座で政談大演説会を開き、この時の演題が「板垣死すとも自由は滅びず」となっています。このように自由民権思想の普及啓発に努めています。

明治18年(1885年)に病を得て、34歳の若さで永眠しました。墓地は義父の小室信夫と同所の東京都台東区谷中霊園にあります。

西原 猪太郎 [にしはら いたろう]



西原猪太郎氏は、彫金技術を身につけ、明治時代の古美術の修復など文化財の補修修復において卓越した技術を発揮し、特に東大寺大仏殿前の国宝燈篭修理などを行いました。

氏は明治4年(1871年)、現在の与謝野町字与謝に生まれ、府立宮津中学校を卒業後、京都府画学校へ学びます。その後、京都府特選生として東京美術学校に進み鋳金を専攻しました。担当教授は高村光雲です。

美術学校在学中より奈良の古美術に深い関心を持っており、卒業後は奈良に定住してその模写に励んでいました。その間、東大寺大仏殿前の国宝金銅八角燈籠の修復鋳造など多数の文化財の補修や模造に精魂を傾けています。

明治36年、第5回内国勧業博覧会が大阪で開催されたのを機に大阪に居を移し、鋳金工場を経営して古美術の修復はもとより、美術工芸品の製作にその優れた天分を発揮し、献身的な技工をもって精力的な活躍を果たしました。しかし、大正元年(1912年)、42歳の若さで大阪で亡くなりました。

氏は、東京美術学校鋳金科の初代卒業生として近代彫金技術を身につけて、明治時代の工業界で活躍しましたが、若くして亡くなったために、残念ながらその業績は広くは知られてはいません。

ただ、猪太郎の短い生涯は、明治の近代工芸をいち早く身につけ、古美術に対する限りない愛着をもっており、その保存と修復に捧げたものであり、その業績は高く評価されています。

鳥居 篤治郎 」とりい とくじろう



鳥居篤治郎氏は、自身が盲目であり、盲人の職業教育にその生涯を傾けました。

氏は明治27年(1894年)、現在の与謝野町 字三河内に素封家として名高い鳥居武右衛門 家に生まれましたが、4歳の時に熱病のため に失明しました。

幼少期に父武右衛門から「障害児をもって、何を恥じることがあるか」として、今日の社会的に不利を受けやすい人々が、社会の中で他の人々と同じように生活し、活動すること

が社会の本来あるべき姿とするノーマライゼーションにあたるような教育を受けています。

そして、父親から受けた教育が、少年期の篤治郎に文学と外国語への関心を呼び込むことになったと思われます。

大正3年、篤治郎氏は東京官立盲学校師範科鍼按科に進学し、ロシアの詩人ワシリイ・エロシェンコに傾倒しました。そのエロシェンコの文学を通して、芸術家や文筆家がサロンとしていた新宿の喫茶「中村屋」に出入りするようになり、そこで大杉栄、竹久夢二、長谷川如是閑らと交流を持つようになりました。

また、「盲人は不自由なれど、不幸にはあらず。」というように篤治郎は行動する社会福祉家であり、それは後に総合福祉施設「京都ライトハウス」の創立につながっていきました。

このように、明治から昭和を生きた篤治郎は「盲人の先覚者」といわれるように盲学校の教師や職業鍼灸師の他、その出版物や著述などは多岐にわたり、その半生を盲人の自立支援のために尽くした人生でした。昭和45年(1970年)にその生涯を閉じました。

細井 和喜蔵 🌃 🖟 🔭 💮 💮 💮



細井和喜蔵氏は、大正時代の労働運動家であり、「女工哀史」の著者としてよく知られています。

氏は明治30年、現在の与謝野町字加悦奥に生まれました。早く両親を失い、加悦尋常小学校5年で近在の機屋に奉公することとなり、その後、大阪に出て関西各地の織物・紡績工場で働き、やがて労働運動に参加するようになりました。

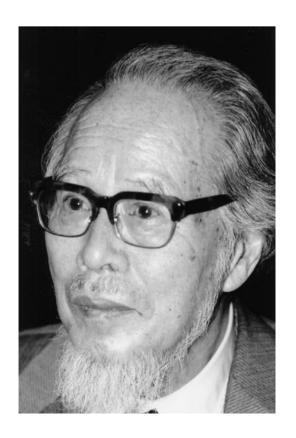
大正9年、上京し東京モスリン紡績KK亀 戸工場に勤務し、翌年の労働争議で活躍する こととなりますが、組合幹部との対立などか ら会社を退職しています。また、同工場で知

り合い結婚した堀としをに生計を支えられながら、プロレタリア文学の創作に入りました。大正12年に自身と妻との体験をもとに「女工」の人間的復権をめざして『女工 哀史』を執筆し、同14年7月に改造社から出版しましたが、翌8月に29歳の若さで 病気のために帰らぬ人となりました。

『女工哀史』の前書きを書いた藤森成吉は「死せる和喜蔵、生ける資本主義を走らす」と述べたように、和喜蔵氏の主な文学作品がほとんど死後に出されました。今日、細井和喜蔵氏の名前は知らなくても、『女工哀史』を知らない人はほとんどないと言うほどであり、小・中・高校を問わず学校の社会科の資料集には『女工哀史』の一節が収録されていることが珍しくありません。

太田 典禮

■おおた てんれい



太田典禮氏は、昭和の医師として避妊具を 開発し安楽死の問題に取り組みました。

氏は明治33年(1900年)に現在の与謝野町字三河内の代々産科の医者で大地主であった太田家の8代目として生まれました。名前を武夫と名づけられますが、典禮とは初代の細見玄秀以来太田家の当主が医師として受け継いできた名前です。

典禮氏は京都府立第四中学校から第三高等 学校、九州帝国大学医学部を卒業して、京都 帝国大学大学院に進学しました。

昭和9年頃まで、氏は京都を舞台に無産者に対する診察運動に携わる一方、産科医として産児制限を自分のテーマとして研究を重ねます。

そこで、避妊方法の研究に心血を注いだ結果、ついに「太田リング」を考案して実 用化に成功しました。

その後、昭和20年(1945年)の敗戦までは東京で太田リングの普及に努めることになりますが、「産めよ殖やせよ」の戦時体制の下で、避妊リングは禁止され、典禮氏も2度の投獄生活を経験することとなりました。

戦後は社会党代議士となって政治の世界に飛び込み、人工妊娠中絶を合法化する優生保護法制定に尽力することとなります。また昭和30年代後半からは安楽死の問題にも取り組み、安楽死協会を設立して、東京で第1回安楽死国際会議を開くなど、安楽死を中心とする死の課題にも全霊を傾けました。昭和60年(1985年)12月にその生涯を閉じました。享年85歳のことです。

このように、太田典禮氏は人間の生と死の問題に生涯を傾けて取り組んだ人生でした。そこには、名もない人々の苦しみに心をよせ、その救済に尽力しようとする心情が脈々と流れており、人間の根本にかかわる諸問題に生涯をかけて取り組んだ先駆者でもありました。



石川晴彦「観音(部分)」(立像)

石川晴彦氏は、大正から昭和期の日本画家で、 特に仏画の作品は高く評価されています。

氏は明治34年(1901年)、現在の与謝野町字後野に、呉服商の父石川利兵衛、母久満の三男二女の末子として生まれました。本名は利治と名づけられました。

石川利兵衛の母は与謝野禮嚴の生家である細見 家から嫁いでおり、利兵衛と与謝野鉄幹とは従兄 弟の関係にあたります。

京都市立美術工芸学校(現在の京都市立芸術大学)を中退した彼は、上京途中に京都で第一回国画創作協会展を観覧し、入江波光、村上華岳の作品に感激し、両者に学ぶことを決意しました。大正8年(1919年)にまず入江波光に入門、波光の最初の弟子となります。同12年(1923年)には村上華岳の評価を受け、以降研鑽を重ねて、ついに華岳を生涯の師としました。

当初は北方ルネサンスの画家であるデューラーやホルバインの影響を受けた細密描写を好み、大正期から昭和初期にかけて父母や妻など近親者をモデルに細密描写に徹した肖像画や美人画を発表しました。この頃は本名の「利治」、または同音異字の「登志春」名義で款記をしています。

昭和11年(1936年)までに父・妻の相次ぐ死に直面した氏は、それまで取り組んできた西洋的な細密表現よりも、宗教的神秘性を追求した線描を基調とする表現に自身の救済を求め、仏画を手がけ始めます。

そうした中で、昭和12年(1937年)頃より雅号「晴彦」を用いるようになりました。 昭和14年(1939年)に村上華岳が没すると、以降どの会派にも属さず独立独歩の 道を歩みます。ほぼ毎年のように仏画個展を開催し、戦後日本の住環境の変化に伴う 岩絵具厚塗りを主とした当時の日本画の動向に左右されることなく、高い精神性をそ なえた線画表現は高く評価されています。

昭和55年(1980年)、心不全のため80歳の生涯を閉じました。墓地は兵庫県宝塚市 清荒神に残っています。

品川 萬右衛門 Land まんうえもん



『百年前の丹後の村おこしの事例』より転載

品川萬右衛門氏は明治時代筒川村長、郡会議員、府会議員などを通じ地域振興に寄与され、また筒川村長当時は事業創立の必要性を説かれ製糸生産販売組合を設立、自ら村長を辞し組合長として地域産業の発展に貢献されました。

氏は、万延元年(1860年)、12月26日品 川家の長男として本坂村で生まれています。 幼名を萬蔵とよび、28歳の時家督を相続し 萬右衛門と改名しました。

明治22年 (1889年)、町村制が実施され筒 川村収入役に、明治24年 (1891年) 4月から34年8月退任まで村政の推進に努めました。この間、村内基幹道路の改修、畜産の振

興、造林の奨励、養蚕技術の向上に尽力されています。

明治34年(1901年)8月に筒川村長を退任し、「筒川繭糸蚕種生産販売組合」を設立操業に至りました。当初は女性従業員50名を使用し業績は順調に推移していき、明治40年には従業員100名を擁すまでに拡大していきました。以後、大正10年に綾部製糸となりましたが、氏が残した功績は大きなものがあります。

また、大正8年(1919年)に全従業員とともに東京見物をした時、スペイン風邪に大勢がかかり、その内42名の方が命を落としました。そのことを深く悲しみ、亡くなった人の冥福を祈るため筒川地区に鎌倉大仏を模して、高さ2.5mの青銅製の阿弥陀如来像を建立しました。この大仏は戦時中の軍事物資の不足のために供出され、現在は石造の仏像に替えられています。従業員を家族同然に大切にしたと伝えられています。昭和3年(1928年)3月9日、その生涯を閉じました。享年69歳のことです。墓所は本坂、菩提寺は曹洞宗知足院となっています。

三嶋一聲 🎒 🕳 💆



『最後のロマン』より転載

三嶋一聲氏は、昭和初期の歌手で小唄勝太郎との「東京音頭」が爆発的大ヒットとなり有名になりました。

三嶋一聲(三野哲太郎)氏は明治21年(1888年)、伊根町字本庄浜で三野家の長男として生まれました。宮津中学校を退学し、絵の勉強を志し東京へ上京しました。その後、絵の勉強のためフランスなどヨーロッパ各地をまわり、シルクロードから中国に入って、鳳山と名乗り、特務機関員としても活動しています。

昭和4年(1929年)、日本に引き揚げ、翌 昭和5年(1930年)、東京で料亭の経営をす

ることとなり、帰国慰労歓迎会の席で歌をうたった時、隣室にいた山田耕筰に呼ばれたことが、歌手となるきっかけとなりました。

コロンビアレコードに入社し、「歌手・三嶋一聲」が誕生します。昭和7年(1932年)にビクターへ入社し、小唄勝太郎と組んで「東京音頭」のレコードが発売されるや爆発的ヒットとなり、日本全国を興奮の渦に巻き込んでいきます。

その後、作詞家西條八十、野口雨情、佐伯孝夫、作曲中山晋平、佐々木俊一らと組んで全国各地民謡100曲近くをレコーディングし、歌手として活躍しました。

昭和13年(1938年)、歌謡界を引退した後は、戦争中の中国大陸各地で歌謡慰問団としての活動も行い、終戦を期に宮津に帰国しました。

その後、生まれ育った伊根町本庄浜へ昭和33年に帰り、そこで過ごしています。そして昭和49年(1974年)7月にその生涯を閉じています。享年87歳のことです。

近世・近代における郷土の先覚者一覧表

【宮津市】

	净巾』					+/12 / 4/ / / / / / / / / / / / / / / / / /	/\	¥¥		
番号	氏		/ 生 誕	地	+	詩代/生年/没年 「江戸時48	分野	業績等		
1	笠	井	浅	七		江戸時代	地域振興	水路掘削、宮津新浜埋立な		
1	上 明 山 合 法	h士/石/i	+		2年 没年	1743(寛保3)	地域振興	ど地域振興。		
	生誕地 呂 福	麗地 宮津市須津				(/				
2	新	宮	凉	庭		江戸時代	学問	西洋医学を学び、京都に順		
	生 新地 (古)	<u></u>	1		+	1787(天明7)	子问	正書院を開設。		
	生誕地 宮津	1日日本	Ł .		_	1854(安政元)				
3	和	田	屏	Ш		江戸時代	世紀	幕末丹後を代表する画家。		
	上 明 山 合 法	h士 <i>宁 A</i>	, P m		+	1806(文化3)	芸術	竜虎図		
	生誕地 宮澤	上一十二	()		+	1873(明治6)				
4	本	庄	宗	秀		江戸時代	でを込み	宮津藩主。幕末期老中となり		
	41 =7.7 1.16					1810 (文化7)	政治	り、第2次長州戦争に副総 督として出陣。		
	生誕地				没年	() (111 -)		I C C C MIPO		
5	依	田	伴	蔵		江戸時代	でをジム	宮津藩士、長州戦争におい		
	正可 (1) (古)	h- 			+	1823(文政6)	政治	て戦死。		
	生誕地 宮津					1866(慶応2)				
6	西西	西 村 奇		石		明治時代	-11- /4-:	幕末明治の丹後を代表する		
	生誕地宮津市字京街道					1826(文政9)	芸術	画家。		
	生誕地 呂淳	下 一 子 万	【街坦		+	1911(明治 44)				
7	売『	ままり ナ	し 兵	衛		明治時代	14.14.11年 (日)	明治 19 年 栗田峠撥雲洞トン		
1	正可 (1) (古)	トロケ		+	1845 (弘化2)	地域振興	ネルの開鑿。			
	生誕地 宮澤	丰甲子初	ない			1912(大正1)				
8	黒 日	3 与	三兵	衛	時代	77111	政治	明治期の宮津町政に参画、		
	生誕地 宮津	+士			2年 没年	1855(安政2)	以们	府会議員。		
	主ლ地 呂 信	<u></u>				1926(大正 15) 明治時代				
9	沢	辺	正	修	生年	,	政治	天橋義塾の、自由民権運動		
*	上紅山 合油	上 上市字柳縄手				1885 (明治 18)	以任	の指導者。		
	主ლ地 呂 仁	上川 丁州			1			日後のよりコーサをサーエ		
10	ルイ	・ル	ラー	・ブ		明治、大正、昭和前期 1857	宗教	丹後のキリスト教布教、天 主堂の建設と女子教育の推		
	生誕地フラ	ランフ				1940 (昭和 16)	小好	進。		
	主襲地ノノ				+	明治、大正、昭和時代				
11	津	原		武		1868 (明治1)	政治	弁護士、宮津町会議員、府		
	上誕地 包围	生誕地 鳥取市				1953 (昭和 28)	政们	会議員、国会議員。		
	工碟地/594	X I J			_	明治、大正、昭和時代				
12	塩	田	広	重		1873 (明治6)	医師	大正、昭和初期の外科医、		
	生誕地 宮津市					1965 (昭和 39)	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	老人医療の発展に貢献。		
		E II1				明治、大正、昭和時代				
13	小	室	万	吉		1877 (明治 10)	郷土史家、	昭和に活躍した郷土史家、		
	生誕地 与部	計野町片				1970 (昭和 45)	俳人	俳人。		
	主ლ地 丁芘	加利門石	11电		汉平	1310 (中日不日 43)				

番号	E	氏 名/生誕地				時代/生年/没年			分	野	業	績	等	
	岩	崎		古	华丰	時代	大正	・昭和時代			郷土史家~	で丹後	機業の歴史、	
14	白	四可	英 精		个月	生年	1897	(明治 30)	郷土史家		京都府の漁業の歴史、丹後			
	生誕地	福知山市	市			没年	1989	(平成元)			の民謡などの郷土史研究。			
	盐	F	毎 攵		郎	時代	昭和日	 時代			総络の砂	戦後の政治家、衆議院議長 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・		
15	刊	前尾繁	三島	KI)	生年	1905	(明治 38)	政治	戦後の政石家、衆議院議長 を務め政界で活躍。					
	生誕地	宮津市				没年	1981	(昭和 56)			で物の収り	ト C (口)	生0	

【京丹後市】

	厅俊巾 】					NIC		
番号	氏 名/生誕	地		持代/生年/没年_	分 野	業績等		
	足 立 久 兵	衛	時代			よって (部件) ときロエン		
1	湖口小左衛	門	生年	1626(寛永 3) 不明	地域貢献	│かつみ(離湖)から日本海 │まで水路、水抜穴造成。		
	生誕地 京丹後市網野町島津・	小浜	没年	1712(生徳 2) 不明		まて小町、小阪八畑以。		
	絹 屋 佐 平	 治	時代	江戸時代				
2			生年	1683(天和 3 頃)	ちりめん	丹後ちりめんの始祖。		
	生誕地京丹後市峰山町織元	<u> </u>	没年	1744(延享 元)				
	一木禅	師	時代	江戸時代		江戸時代の名僧で、仏像など		
3			生年	1771 (明和 8)	僧侶、陶芸	の陶芸作品製作。		
	生誕地京丹後市網野町浜計	i	没年	1836 (天保7)		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		
	初 代 松	助	時代	江戸・明治時代		以类的。以类类类工作。了		
4	二代長谷川松	助	生年	1779 (安永 8) 頃 1832 (天保 3)	石工	地蔵院の地蔵菩薩立像、天 長寺の子安地蔵等を制作。		
	生誕地京丹後市峰山町鱒留	j i	没年	1853(嘉永6) 1908(明治 41)				
	蒲 田 善 兵	衛	時代	江戸・明治時代	ちりめん	綿縮緬の製造を考案。		
5	一		生年	1813 (文化 10)				
	生誕地 京丹後市大宮町口大野			1878(明治 11)				
	松本重太	郎	時代	明治時代	経済	渋沢栄一と共に明治財界の		
6			生年	1844 (弘化元)		三旦頭。		
	生誕地京丹後市丹後町間人		没年	1913 (大正2)		→ * * * * * * *		
	稲葉市郎右衛門 芽	英裕	時代	明治·大正·昭和時代				
7	稲葉市郎右衛門 景	景介	生年	1846 (弘化 3) 1882 (明治 15)	政治家、 地域貢献	実業家、自由民権運動、地 域貢献。		
	生誕地 京丹後市久美浜町土	:居	没年	1915(大正 4) 1936(昭和 11)	心纵只顺	ベス II // 0		
	松田	道	時代			女子高等教育、同志社女専		
8			生年	1868(明治元)	女子教育	初の女性校長。		
	生誕地京丹後市峰山町室		没年	, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,		1/4・/ 入口(人) (2)		
	飯室岸	蔵		明治時代		自由民権運動の時代の青年		
9				1872 (明治 5)	青年活動	活動。		
	生誕地京丹後市久美浜町布	「袋野	_	1909 (明治 42)				
10	谷源	蔵		昭和時代		敬老会創設、郷土史家(間		
	10			1872 (明治 5)	地域貢献	人民俗の研究)。		
	生誕地京丹後市丹後町間人							
11	吉 村 伊	助		明治・大正	h. L는 프 ± h	吉村財団設立、地域貢献、		
	生誕地 城崎郡日高町		生年	1873 (明治 6) 1928 (昭和 3)	地域貢献	国会議員。		
	土ლ地 坝 町和 日		汉牛	1940 (中国作日3)				

番号	氏 名/生誕地					Ц	持代/生年/没年	分 野	業績等		
	永	浜		宇	平	時代	大正・昭和				
12	7,0	1/1		<u>,</u>	<u>'</u>	生年	1880 (明治 13)	郷土史家	郡町村誌、丹後史料叢書編さん。		
	生誕地 京丹後市大宮町三重					没年	1941 (昭和 16)				
	羽	Н	1		亨	時代	明治·大正·昭和時代				
13	2,3		-		1	生年	1882 (明治 15)	教育者	東洋史学者、京都帝国大学総長。		
	生誕地	京丹後市	 持峰	町五箇		没年	1955(昭和 30)				
	小	谷		勝	重	時代	昭和時代				
14	,1 .	H		/3/3	<u> </u>	生年	1890 (明治 23)	裁判官	最高裁判事		
	生誕地	京丹後市		医町間人		没年	1963(昭和 38)				
	平	林	初	1 之	輔	時代	大正時代		 プロレタリア文学運動、推理		
15	·	1 11 10 2		TIN	生年	1892 (明治 25)	文学	作家・文芸評論家。			
	生誕地	京丹後市		阿黒部		没年	1931 (昭和 6)		The second secon		
	藤原勘		治時代	時代	昭和時代		**************************************				
16						生年	1895(明治 28)	社会福祉	新聞記者、救ライ病活動。		
	生誕地	京丹後百		E 町間人		没年	1972(昭和 47)				
	中	村			遥	時代	昭和時代		 大阪水上隣保館、養護施設な		
17		. •			~=	生年	1903 (明治 36)	社会福祉	ど社会福祉事業。		
	生誕地	京丹後市	 	」町鱒留		没年	1977 (昭和 52)				
	小	牧	源	太	郎	時代	昭和時代		 シュールレアリズム(超現実		
18	•		•		•	生年	1906 (明治 39)	画家	主義)。		
	生誕地	京丹後下	市大宮	町口大	野	没年	1987 (昭和 62)				
	田	村	1	げ	る	時代	昭和時代		 「白い花の咲く頃」など多数の		
19	ш			· ' /	<i>る</i>	生年	1908(明治 41)	作曲家	曲を作曲。		
	生誕地	京丹後市	 卜峰 山	」町白銀		没年	1980 (昭和 55)		щ с т щ о		

【与謝野町】

番号	氏	;	名/5	主 誕	地	B :	寺代/生年/没年	分 里	野	業	績	等
	与	謝		蕪	村	時代	江戸時代			1754(宝暦 4)年から 3 年余り 丹後で居住。	3 年全り	
1	7	时门		無	4.1	生年	1716(享保元)	文学・芸術	芸術		り平がり	
	生誕地	大阪市	都島区			没年	1784(天明 3)			71 及 C 冶 L 。		
	士口] 弘 [兵衛、	为	公 自7	時代	江戸時代			文政5年宮津	漆石此	一塔の山
2		1 材 う	七 稱、	柯	(口 口)	生年	不明	百姓一	揆	心人物、処刑。		大ツヤ
	生誕地	予謝野	町石川			没年	1824 (文政 7))	
	3 与	謝	野	禮	嚴	時代	江戸・明治時代			明治時代に社会公益事業に貢献した歌人。	車業に音	
3		的 判	到	//豆	周文	生年	1823 (文政 6)	文学			ず木に貝	
	生誕地 与謝野町温江					没年	1898(明治 31)			19001010		
	真	名	井 純			時代	明治時代					
4	共	白	开	上 純	_	生年	1829(文政 12)	地域振	興	養蚕と製糸技術の改良。		
	生誕地	子謝野	町岩滝			没年	1902(明治 35)	1				
	اد	室		信	夫	時代	江戸・明治時代			早堀議院設立	建白建	罗 夕. 口
5	小	至		1日	大	生年	1839(天保 10)	政治・総	圣済	民撰議院設立建白書署名、日本郵飲会社記立に見力		
	生誕地	予謝野	町岩滝			没年	1898(明治 31)			本郵船会社設立に尽力。		10
	神	お庫		Ŀп	常	時代	明治時代			帝国議会知代	金議院	議員 広
6		判艾	5 知		币	生年	1848(嘉永元)	政治	帝国議会初代衆議院議員、内閣法制局長官。			
	生誕地	- 謝野	町石川			没年	1905(明治 38)			面位则可以日本)	

番号	Đ	£	名/	生 誕	地	目	持代/生年/>	没年	分 野	業績等	
	小 室			信	介	時代	明治時代			天橋義塾設立に尽力、自由民	
7	/1,	至		10	21	生年	1852(嘉永:	5)	政治	権運動。	
	生誕地	宮津市	鶴賀			没年	1885 (明治	18)		作及主動。	
	西	原	猪	太	郎	時代	明治時代			東大寺大仏殿前の国宝灯篭修	
8		尽	狛	八	(IA	生年	1871 (明治	4)	芸術	理など。	
	生誕地 -	与謝野	町与譲	t		没年	1912(大正5	元年)		注 なこ。	
	Ė F		篤	—— 治	郎	時代	昭和時代				
9	鳥	居	馬	【口	되	生年	1894(明治:	27)	盲人教育	盲人の職業教育。	
	生誕地 与謝野町三河内					没年	1970(昭和 4	45)			
	如 井	井	和	喜	蔵	時代	大正時代				
10	細	开	个 口	音	爬	生年	1897(明治:	30)	文学	『女工哀史』の作者。	
	生誕地 -	与謝野	町加竹	色奥		没年	1925 (大正	14)			
	+	田		Ш	示曲	時代	昭和時代			選妊具の開発、安楽死の問題	
11	太	Щ	典		禮	生年	1900(明治:	33)	医学	に取り組んだ。	
	生誕地·	与謝野	町三河	了内		没年	1985(昭和 0	60)		(CAX 9 /AH / U/C。	
	石 川	111		嗐	ॐ ;	時代	昭和時代				
12		晴		彦	生年	1901(明治:	34)	芸術	仏画を多く製作する。		
	生誕地 -	与謝野	町後野	ř		没年	1980(昭和:	55)			

【伊根町】

番号	氏 名/生誕地]	時代/生年/没年	分 野	業績等		
	 品 川 萬 右 衛	門	時代 明治・大正時代		筒川村長、繭糸蚕生産販売組 合設立、府会議員。		
1	四川芮石州		生年 1860(万延元)	地域振興			
	生誕地 伊根町字本坂		没年 1928(昭和 3)				
	三 嶋 一 聲		時代 昭和時代		小唄勝太郎との「東京音頭」		
2		窜	生年 1888(明治 21)	芸術	が爆発的大ヒットとなる。		
	生誕地 伊根町字本庄浜		没年 1974(昭和 49)				

引用・参考文献一覧

○『国史大辞典』吉川弘文館、○『野田川町史』(1969)野田川町、○『加悦町史』(1974)加悦町、○『岩 滝町史』(1970) 岩滝町、○与謝野寛『礼厳法師歌集』復刻版(1993) 加悦町、○『特別展 京都の自由 民権運動-自由と民権を希求したひとびと-』(1991)京都府立丹後郷土資料館、○『与謝蕪村と丹後』 (1994)京都府立丹後郷土資料館、○『宮津市史 通史編 下巻』(2004)宮津市、○『天橋義塾-小室信 介と沢辺正修-』(2004) 宮津市歴史資料館、○北条喜八『最後のロマン』(1999) あまのはしだて出版、 ○和田 稔『百年前の丹後の村おこしの事例』(2012) 萩の郷福祉工場、○『日本史大辞典』平凡社、○『川 上百年史』(1975) 川上小学校創立百周年記念祭実行委員会、○『丹後町史』(1976) 丹後町史編さん委 員会、○『大宮町誌』(1982) 大宮町誌編纂委員会、○『網野町史』(1960) 網野町史編纂委員会、○『網 野町誌』網野町誌編さん委員会、○『峰山郷土史上・下』(1963) 峰山郷土史編纂委員会、○『久美浜 町誌』(1975) 久美浜町誌編纂委員会、○『久美浜町史資料編』(2004) 久美浜町史編纂委員会、○『弥 栄町史』(1970)弥栄町史編さん委員会、○田中尚之『石工松助を語る』(2003)清水印刷株式会社、○ 岩崎英精『丹後ちりめん始祖伝』(1965) 丹後ちりめん始祖顕彰会、○『永浜宇平の業績と略歴』(1979) 奥丹後地方史研究会、○『網野町人物誌』(1973)網野町郷土文化保存会、○中嶋利雄・原田久美子編『日 本民衆の歴史地域編10』(1987) 三省堂、○『京都府熊野郡久美浜稲葉家資料調査報告書(第三分冊)』 (2008) 京丹後市教育委員会、○『木津村誌』(1986) 木津村誌編纂委員会、○『ふる里の風土が育んだ 先人たち』(1991) 峰山町立五箇小学校○田中義一『中村遥先生と大阪水上隣保館』(2003) あまのはし だて出版、○『光徳』(1968) 吉村財団謝恩記念事業公徳会、○『雙軒松本重太郎翁傳』(1985) 松本翁 銅像建設會、○『両丹地方史』第 55 号奥丹後地方史研究会、○奥丹後地方史研究第 29 号奥丹後地方史 研究会、○中川米造「塩田広重」『日本大百科全書(10)』(1986) 小学館、○『岩崎英精先生を語る会 - その人と業績を偲んで-』(1990)、○『岩崎英精文庫目録』(1994)、○前尾繁三郎「大蔵省から政界へ」 『政の心』(1974)毎日新聞社、○前尾繁三郎「父母を語る」『政の心』(1974)毎日新聞社、○前尾繁三 郎『私の履歴書 - 牛の歩み』(1974)日本経済新聞社、○前尾繁三郎「私の議長論」『政治家の方丈記』(1981) 理想社、○『前尾繁三郎著『十二支攷』別冊』(2000)、○『吉津村誌』(1924)

6

掲載写真提供および資料所蔵者一覧

○笠井浅七頌功碑(5p)、和田屏山作紫竜昇天図(7p)、本庄宗秀(8p)、西村奇石作孔雀図(10p)、栗田トンネル(11p)、黒田宇兵衛写真(12p)、津原武写真(15p)【宮津市教育委員会提供】○新宮凉庭肖像画(6p)、岩崎英精写真(18p)、小室信夫像(43p)、神鞭知常写真(44p)【丹後郷土資料館提供】○依田伴蔵をまつる残念社(9p)【広島県廿日市市教育委員会提供】○沢辺正修像(13p)、小室信介像(43p)【同志社大学図書館蔵】○太田典禮写真(49p)【太田亙提供】○ルイ・ルラーブ写真(14p)【カトリック宮津教会提供】○塩田広重写真(16p)【癌研有明病院提供】○小室万吉写真(17p)、与謝野禮巖(41p)、真名井純一写真(42p)【与謝野町教育委員会提供】○前尾繁三郎写真(19p)【宮津市立前尾記念文庫提供】○絹屋佐平治お墓写真(21p)、松助の金刀比羅神社猫像写真(23p)、蒲田善兵衛記念碑(24p)、松本重太郎写真(25p)、稲葉市郎右衛門英裕・景介(26p)、谷源蔵写真(29p)、永浜宇平写真(31p)、小谷勝重写真(33p)、藤原勘治写真(35p)、小牧源太郎写真(37p)、平地地蔵写真(40p)【京丹後市教育委員会提供】○一木禅師陶芸作品(22p)【個人蔵】○吉村伊助写真(30p)【吉村商店提供】○羽田亭写真(32p)、中村遥写真(36p)【京丹後市立五箇小学校提供】○平林初之輔写真(34p)【平林初之輔生誕百年記念誌転載】○田村茂写真(38p)【田村しげるブロマイド】○飯室岸蔵ほか写真(28p)【京丹後市立川上小学校】○与謝蕪村像(39p)【京都国立博物館蔵】○石川晴彦仏画作品(50p)【個人蔵】

協力者

本書の作成にあたっては下記の機関、関係者にご教示、ご協力いただきました。記して感謝を申し上げます。

京都国立博物館、同志社大学図書館、京都府立丹後郷土資料館、網野郷土資料館、癌研有明病院、カトリック宮津教会、宮津市立前尾記念文庫、京丹後市立五箇小学校、京丹後市立川上小学校、広島県廿日市市教育委員会、吉村商店、東武則、文殊清道、吉村緑、村上弘樹、近藤雅廣、木崎清、芦田行雄、太田亙

近世・近代における郷土の先覚者

(丹後地区広域市町村圏事務組合2市2町政策連携会議調査報告書)

発行 平成23年3月30日

丹後地区広域市町村圏事務組合

〒627−8567

京都府京丹後市峰山町杉谷889

Tel0772-69-0120

編集 功績のある郷土の著名人調査検討会議

印刷 三丹印刷